

332
367

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

始



332
364

農學士村上正賀著

盆栽
庭園
松
培養及
手入法

東京

大學館
發兌

序

世界の公園との評ある我邦はどこまでもその景色よきを以て
 誇らせねばならぬ。我邦の風景は松に負ふところが多い、松
 なくては天の橋立も三保の松原も舞子の濱も人を引き付ける
 力がなくなる。庭園に於けるの松は四時の眺めを良からしめ
 寸尺に充たぬ松の盆栽でさへごれだけ人の愛を引くか、松柏
 にたごへたる大和撫子の操は松あるが爲めに堅められてある
 ことが幾何であるか、かゝる天然と人事とに關係深き松につ
 いて従来一つの書の現はれなかつたのは寧ろ不思議と言はね

1. 11. 2
 肉交

はならぬ、余は必ずしも松通達は云はない、然かし松について少なからぬ興味を以て研究した事を書き集めたのが本書である、西洋趣味に酔はれて居る人々よ我邦に松あることを忘れてはならぬ、緑なる松は紅なる西洋草花よりも趣味深き點がある、近頃は松が盛んに外國へ輸出せらるゝではないか、園藝の盛んなる今日他の植物に後れざらんこて聊か怪しげなる氣炎を吐いて置く、幸にして本書に由つて少なからず松趣味の一層擴からんことを待つのである。

著 者 識

目 次

總 說

松と海岸……………一 松の性狀……………七

松風は天籟の聲……………三 山野の松と盆栽の松……………七

松と國民性……………四

第一話 松の生理……………九

葉の作用……………二 同化作用と水分……………一六

同化作用……………三 水分發散作用……………一七

同化作用と日光……………三 莖の作用……………一八

同化作用と溫度……………一五 莖の生育と境遇……………二〇

(一) 次 目

はならぬ、余は必ずしも松通ごは云はない、然かし松について少なからぬ興味を以て研究した事を書き集めたのが本書である、西洋趣味に酔はれて居る人々よ我邦に松あることを忘れてはならぬ、緑なる松は紅なる西洋草花よりも趣味深き點がある、近頃は松が盛んに外國へ輸出せらるゝてはないか、園藝の盛んなる今日他の植物に後れざらんごて聊か怪しげなる氣炎を吐いて置く、幸にして本書に由つて少なからず松趣味の一層擴からんことを待つのである。

著 者 識

目 次

目	目	目
總 說	松と海岸	松の性状
.....
.....	松風は天籟の聲	山野の松と盆栽の松
.....
.....	松と國民性
.....
.....	第一話 松の生理
.....	葉の作用	同化作用と水分
.....
.....	同化作用	水分發散作用
.....
.....	同化作用と日光	莖の作用
.....
.....	同化作用と溫度	莖の生育と境遇
.....

(二) 目 次

根の作用……………三

葉と莖と根とは共同で働く……………二五

第二話 松の種類……………二六

赤松……………二六 這松……………二七

黒松……………二七 朝鮮松……………二八

姫小松……………二八 外國の松……………二九

五葉松……………三〇

第三話 松と土質……………三一

盆栽松と土質……………三一 好適の配合土……………三二

盆栽松は病的である……………三三

第四話 松と燐炭……………三三

燐炭の製法……………三三 燐炭は温度を吸収す……………三五

(三) 目 次

燐炭肥料のこと……………三五

燐炭肥料の効果……………三五

燐炭は養分を吸収す……………三六

燐炭は土質を膨軟にする……………三七

燐炭は根の發育を助ける……………三六

燐炭と松……………三九

第五話 松と肥料……………三九

松と無臭肥料……………三九 加里質肥料……………四〇

智利硝石……………四〇 灰類……………四一

硫酸アムモニア……………四一 硫酸鐵……………四二

硝酸加里……………四二 油糟……………四三

過燐酸石灰……………四三

第六話 施肥の方法……………四三

盆栽は肥料の工合で早く仕立らるゝ……………八五

庭園の松の施肥法……………八六

第七話 松の植込み方……………八九

松の産地……………九〇

松と風との関係……………九一

松の移植方法……………九四

鉢の種類……………一〇〇

太根を切り去ること……………九六

第八話 松の仕立方……………一〇五

世の流行と枝振り……………一〇五

枝を引き付ける方法……………一〇八

仕立てる時期と肥料……………一一〇

盆栽は自然の縮圖……………一一七

松の枝振りのこと……………一二三

第九話 松と接木法……………一二〇

接木術と植物の變化……………一二〇

接木の季節……………一二六

接木の活着する理……………一二三

松と割接法……………一二八

接穂のこと……………一二四

切接法のこと……………一二九

第十話 松の實蒔……………一三三

疎植のこと……………一三三

實蒔を行ふ場合……………一三三

植林の松苗養成……………一三六

實蒔床のこと……………一三四

植林の松苗養成……………一三六

煙炭肥料を用ゆること……………一三五

實生盆栽……………一四二

第十一話 松の手入法……………一四五

丹精が必要のこと……………一四五

屋の内外出入のこと……………一五五

枝葉の手入……………一五八

肥料の施し方……………一五八

水分の施し方……………一五九

第十二話 根上り松の仕立方……………一六三

松の根は境遇に由つて上る……………一六四 盆栽松の根を上る法……………一六六

庭の松根を上げる方法……………一六五

第十三話 松の盆栽と苔……………一六九

苔の種類……………一六九 川石に苔を附ける方法……………一七五

苔の石に付ける方法……………一七三

第十四話 松と石……………一七六

名石の種類……………一七七

第十五話 松と詩歌と景色……………一八二

詩歌の題としての松……………一八一 松と風景……………一八二

松は人心の琴線に觸るゝ性がある……………一八七

世界の公園と松……………一八七

松を到る所に植ゆること……………一八九

第十六話 衛生と松……………一九〇

都會の空氣の不潔……………一九〇 街路と松……………一九四

松の葉は空氣を濾す……………一九三 街路松を植へる方法……………一九五

第十七話 紀念樹と松……………一九五

紀念樹としての松……………一九七 紀念林の利用……………二〇二

松は永世枯死しない……………一九九 松の腐朽を防ぐ法……………二〇四

第十八話 松茸の養成……………二〇五

松茸狩の奨勵……………二〇五 松茸人工培養法……………二一一

松茸生育の理……………二〇七

目次終

盆栽 庭園松培養及手入法

農學士 井上正賀 著

總 說

千歳の緑を湛ゆる松は古來から我邦觀賞植物の隨一であつた、一つの庭園には必ず松が伴なふておる、數ある盆栽の中でも松はその大部を占めて居る、白砂青松とは我邦の海岸の景色を形容する唯一の言葉である、海濱の砂白うして千波萬波の打ち寄する磯邊に百千世を経る松がその雄姿を聳てるその様は實に一幅の繪である、天に聳ゆる富士の根も松ありてこそその偉大を致すのである、吾等を載する日本島は四面松にて圍まれておる、一本の松の伴はない海岸

は恐らく稀れである、紅なる花は或は才子佳人の心緒を亂すに足らんかなれども空閑を守る貞婦には緑なる松でなければ相手となるには不向きである、天の色、海の色、草木の色何れもみな大体に於て緑である、緑の中の緑を代表するものは松と云ふても差支えがない、四時變らざる松の緑は以て貞婦の心を慰むるに足り寸尺に縮められたる盆栽の松は以て萬人の愛玩を受くるに足り庭園に栽えられたる一本の松でさへそが床しさを増すのである、微風軟風松が枝に當つて自から起る松聲は之れ天の聲である、自然の聲である、誰れかかゝる聲音を聴きて心を清めざるものあらんや、世の進むにつれ世務の劇しくなるにつれて日一日と吾等の心神は徒らに蝶が花を追ふ如くに仕事を追はねばならぬ、いや追はれておるのである、従つてそが疲勞の度も層一層と増して来る、身体の消耗は或は飲食物に由つて價はるゝなれども心神は之れのみにては慰安を受け

ることは出来ない、心神の疲れは或は眼に由つて慰みを受くることも出来る、然かし白砂青松の海岸に立つて松聲濤聲相和するの時或は庭園の松が枝が一種の聲音を發するのとき之れを通俗の心を以て聞けば一向に趣味も何にもないやうなれども少しく心を静かにしてそが天籁の聲を味ふときは場合に由つては美人の織手に觸れる琴の音よりも況んや「ピアノ」や「オルガン」の響きよりも遙かに吾人の心緒に觸れることが強いのである。

天の羽衣は松が枝に掛つたのであつた、三保の松原や松島は松あるが故に景色がよいのである。吉野の櫻は數莖の松が點々として交はるので一層の美を増すのである、紅なる花は緑なる松と相交はつて一段とその趣味を深くするのである、千紫萬紅と咲き亂れたる庭園の一方にそが枝振りさへも奇しき松が聳えておつてこそ面白いのである。

葛に纏はれたる老松は昔から旅人の目印であつた、東京の澁谷には常盤御前手植の松がある、我邦には到るところに何の某手植の松と云ふのがある、吾等の祖先が如何に松と離る可からざる關係を持つて居つたことは之れでも分るではないか、いや我邦土そのものが松の名所であるのぞ、僅か一葦帶水を隔て、呼べば答えんとする支那大陸には松はないのである、あつても極めて少いのである、況んや歐米の諸外國には日本のやうな松はない、櫻花が我邦の特産であるやうに菊が我邦固有の花であるやうに松が我邦の特産である、松は山林樹木としては直接の營利的の樹木としては或は價値が少いものであるかも知れぬ、然かし古から營利的以上に我邦民に利益いや影響を及ぼしたことは非常のものである。

我國民性の或る部は確かに松に依つて形造られておる、「花は櫻木人は武士」の

時代には櫻は確かに武士の性狀に偉大の影響を及ぼしたのである。千歳の緑を堪ゆる松は我邦に古から幾多の貞婦を出したことに非なる力を持つておると余は斷言するのである、松の緑と女の操とは離る可からざるものである、幾多の詩や歌にこれ程書かれ歌はれてあつたか、知る人ぞ知るところである。

「松の緑と女の操」之れ我國民性を代表する一面の言葉ではあるまいか、如何に壓制の政府を戴くとも如何に政治上に變動があるうとも足利の天下のときも徳川の天下のときも桂公爵の主相のときも乃至は西園寺公の總理大臣のときも之れ許りは變らないのであつた、女に操がなければその國は亡ぶのである、數人の男に關係のある女は之れ惡魔である、惡魔の多い社會は人力で維持することが出来ない、露をだに厭ふ大和の女郎花はごこまでも降る「アメリカ」に袖を

濡らさぬ位の決心がなくてはならない、一婦は同時に二夫に見えてはならない。之れ天道である、天理である、然かし此天理が往々にして破られるからたまらない、いや古今を論せず東西を問はず随分一婦にして同時に數夫を有するものがある、然かしかゝる天道にそむいたことが多ければ多い程その國は亂れその身は亡ぶのである。

然かし幸にして我邦では古から松の縁が女の操を守つておつた、婦女にして亂らかな心を起すときには常に庭の松が無言の忠告を與へておつた、無言なる松が如何に多情なる婦女の性格に偉大なる好影響を與へたかと言ふことは之れ余の私言ではあるまいと思ふ。

かやうに精神上に偉大なる關係を有する松、我邦の以て誇とする松、庭園を飾る松、寸尺に縮められた盆栽となつて美裝されたる床の間の主人公とさへなる

可き松は吾等の研究に價す可きものではあるまいか、近來はだん／＼諸種の盆栽や草花や花卉類などについての培養の仕方など研究されつゝあるのであるがまだ松のみについて特別に調べたものゝないのは聊か物足らぬ心地がするのである。

元來松はその性狀から云へは中々頑健なものであつて、自然の狀態に於ては養分の少なき砂土の中にも土壤分の殆んどなきやうな巖の上にさへもそが根を張り技を擴げて生育しておるのである、然かし之れを盆栽にしたり庭に植えたりする際には性が頑健だからと云ふてやたらにそのまゝに放つて置いてはいけな、い、それでは枯死する場合も多いし、よし枯死しないにしても枝をためたり其他の手入れをしてそが眺めを良くするには相當の培養法を施さなくてはならない、山野に自生せる松と庭園に植え込んだり盆栽に仕立てたりする松とはその

性狀も自から異なつておるのであつて彼は強く之れは弱きものであると云ふことを先づ第一に考へなければならぬ。

盆栽にされたる松はその上等のものとなる中々高價であつてその價數百金に上るものさへ決して少くない、従つて之れが培養の方法を能く心得て萬に一つも枯死さすやうなことがあつてはならぬ、抑も盆栽の松として貴ぶところは種々あれども要は幹太く年老いたるが如く見えて然かもその枝振片寄らず何處もなく締りのよきものを云ふのである、乃ち成る可く僅かの年數の間に多年を経たらんが如き風姿を備へさすのが培養の秘訣と云ふ可きであつて肥料や土質の關係で或る程度迄は如何様にでも造り上げることが出来るのである。

要するに松とても一個の植物である以上は之れが培養の方法を怠ればよ、枯死しないにしたとて吾々の意のまゝに仕立てることが出来ない、元來盆栽は一

方からいへば植物をいぢめてその發育を妨げるものではあるがさりとて只いぢめるだけで他方に於て之れが培養にも注意をしないでは終に枯死してしまふのは見易きの理である、要は活さず殺さすの内にその枝振りを意のまゝにためてその風姿を仕立て以て永くに保存する工夫をするのが肝要である。

然かし元來が生きた植物である以上は常に絶えず注意をしてそが培養を怠らぬやうにしないと何時とはなしにその樹勢が衰えて終には取り返しの付かぬこととなるから平常の手入が肝要である以下順を追ふて段々に話すことにする。

第一話 松の生理

すべて何れの植物でも各々その目的に應じて之れを培養してその目的を達せんとするには、先づ之れが生育の理を知らなければならぬ、而して千差萬別と

數ある植物には各々その特有の性状を備えておるもので従つてその生理の状態が多少異なるのを免かれないから各特殊の植物について之れが生理を述べなければならぬ。

然かし何れの植物でも大体に於てはその生理作用の一致する點が少くないから此話に於ては一般植物共通の生理作用を述べると同時に松に特有の作用を話すことにする。

元來植物の枯れるのも能く生育するのも何れもみなそれ／＼の生理作用に基づくのである、一口に云へば生理に反したことが段々重なるとその植物は終に枯死し生理になつたことを施せばすん／＼と生育するのである、然かし植物を育てるのは各々その目的が異がつておつて松について云へば山に植えて單にその生長をのみ欲する場合と庭園に植へ込みてその枝振りを造つてそが眺めを良

くするのを目的とする場合と或はまた數十丈の大木となる可き運命を有するものを寸尺の丈けに縮めて盆栽に仕立てる場合とがあるからその目的に応じて之れが手入れ培養の方法を異にせなければならぬのは云ふまでもないことである、乃はち一般から云へば松には同じ年數を経たものでも一は數十丈の大木となり一つは一、二尺の盆栽となつておると云ふやうな甚だしき差異があるが之れみなその生理作用に依つてかく異なること云ふのである。

如何にすればまた何故にかくもその大きが異なるかと云ふことを説明してその理を應用するのが茲に述べる生理の目的である。

(一) 葉の作用

葉はその形千差萬別であるがどんなに形が異なつて居つてもその作用はみな一つである、従つて松のやうな葉が針狀をしておるものでもその作用に變りはない。

いのである、いま先づ一般の葉の作用を述べるとその主なる働としては同化作用を営むことである。

同化作用とは根から吸収した養分と葉自身が空中から吸ひ込んだ養分とを化合させて之れを消化して自身の養分とするので頂度人間が種々の食物を食してそれを胃で消化して血液となして自分の身体を養ふと同じであるから葉は實に動物に於ける胃の作用を営むものである。

乃ち根からは水分に溶解した肥料分を吸ひ上げ葉自身はその氣孔から空中の炭酸瓦斯を吸収してそれを合体して消化して自体を直接に養ふ養分とする作用を同化作用と云ふのである。

ところで葉が此同化作用を営むには日光と温度と水分とを要するので此三者は何れもみな必要であつて何れ甲乙なきものながらその中でも最も大切なのが日

光である、此故に葉は成る可く日光に觸れなければならぬ、いや何れの植物でもその枝振りの工合其他のことがみななる可く葉を日光に觸れさすやうに出来ておる例へば甘藷の葉の地面を蔽ふておる様を上から見ると恰も特に寄木細工のために并べたやうになつておる、すべての植物の葉もみなその通りで何れもみななる可く能く空中に擴がつて出来得る限り光線を受けんとしておるのである。

松などの葉は他の植物の平たき葉に較べると大に其趣が異なつてはおるがやはりその四方が日光に觸れることを要するので出来得る限り細かに光線に當るやうになつておる、葉と光線とは離る可からざる關係のあるものでもし植物が日光を受けなければ直ちに枯死しないまでもその生育は直ちに停止されるのである、松なども之れを盆栽に仕立て、室内に置く際には無論その生育作用は止

まつておるのであるが、盆栽などには寧ろ之れが必要なので多くの場合にその生育を制限するのである。

もしも松を只その生育を欲するために充分に日光に當てるやうなことがあればすん／＼と生長して盆栽には不向きになるばかりでなくたとへ一旦盆栽にしたものでもあまりにその生育が強勢に過ぎて之れを仕立てるのに寧ろ不利なることが多いためである、此故に適宜室内に入れて直接に日光に觸れさすやうのことなく同化作用を制限し従つてその生長を遅くするか場合に由つては全く停止させる方法を探るのである。

乃ほち盆栽に於ては植物を生長さすのが目的でなく却つて之れと反對にその生長を止めるのであるから成る可く光線に觸れぬやうにする場合が多いのである、然かしそこが程度問題であまり日光に觸れさせずに置いても終に枯死する

場合があるから能くその點に注意して目的を達するやうにしなければならぬ、普通松の盆栽をばざれ位の程度で日光に觸れさすべきやと云ふやうなことについては後に述べることにする。

日光に次いで同化作用に影響を及ぼすものは温度である。元來温度は植物体全般の作用にその影響を及ぼすこと極めて大なるものであるやうに同化作用にも重大の關係を有するのである、乃ほち植物は温度が低ければ全然同化作用を営まないのである、冬植物が生長しないのは全く之れがためである、乃ほち植物は春や夏のやうな温度の高いときにはすん／＼生長するけれども秋から冬にかけて温度が低くなるとその生育は止まるのである、此故にすべて植物を培養してそが生育のみ欲する場合には人工で成る可く高温を與えるやうにするので彼の温室などの利用は全く此點から割り出したのである。

然かし前にも云ふやうに數十丈となる可き運命を有する松其他の樹木を寸尺の長さに縮めて盆栽として楽しむとするには元よりその生長を制限しなければならぬのであるから温室を利用するのと反対に夏季近頃流行せる氷室内に入れてその生長を止めると云ふやうなことは將に行ふ可き場合がないとも限らぬのである、かやうに氷室内に容れないにしても少くとも室内の冷ややかなる場所においてその生長を制限することは常に行ふ可きことである、いや盆栽として室内に置けば知らずかゝる作用の行はれるのである。

温度の次に同化作用に關係のあるのは水分である、此水分の關係が中々見逃がす可からざることである、普通の作物が枯れたり盆栽が枯れたりするのは主として水分との關係である、素人が松の大切な盆栽を枯すことのあるのは多くは此水分の關係である植物が生育したり生活力を維持するには水分の必要なる

は元より云ふまでもないことであるが、さりとてその水分が多きに過ぎると根が害を受けて之れがために植物が枯死するのである、特に松などではその要する水分が他の植物に較べると比較的少ないから之れを施す水分の量が少しく多きに過ぎても害があるのである、彼の土壤の殆んどなきと思はるゝ岩上に松が如何にその雄姿を聳たてゝ居るかを思へば如何に僅かの水分で松が育つものであるか分るであらう、いや水分が多きに過ぎたならば害があるか分るであらう。

水分が何故に植物に必要なかは尙ほ人身に水分の必要であると同じ理で一口に云へばその体内に養液の循環をさすのに必要なのである、如何に養液が葉で同化されて多く出来てもそれが体内を運行しなければ何にもならないその循環を司るのが乃ち水分であるのだ、然かし松の盆栽などのやうにその生理

作用が活潑でなく寧ろ停止して居ると云ふやうなものでは水分は極めて少量でよいのである、いや少量を施さなくては害があるのであるから大に此點に注意しなくてはならないのである。

葉の作用としては同化作用が主なるものであるが此同化作用と連關して重要な水分發散作用は植物生理上面白い關係を有するもので「ポンプ」でも達することの出來ぬやうな數十丈の高さのある大木の先きまでも水分が上るのは種々の作用の結果としても主として此水分發散作用のためである、中々容易なことで數十丈の大木の先までは水は達しないのである、然るにかゝる高さにまで水の達するのは疑ひもなく此發散作用に負ふところが多いのである、すべて植物の葉からは水分が絶へず蒸發して居る、その蒸發した缺を補はんがために根から吸ひ上げられた水が順ぐりに上へ上へと上つて行くのである、かくて水が

植物の最下端から最上端に達するのである。

さてこの水分發散作用は葉の形状と密接なる關係があつて葉が平くて大きなものはその發散する水の分量が多く松のやうな針の形状をして居る葉はその分量が少ないのである、従つて此關係で根から吸収する水分の量と葉の形状とは密接な關係があつて松が比較的水分を要することの少ないと云ふのは全く此理由に基づくので松などは我邦にある植物の内でも比較的極めて水分を要することの少ない植物である。

此理はやがて日常松の盆栽を手入するに當つて應用さる可きもので他の平くて廣き葉を有するものに施すやうに水分を施しては却つて害があるのである。

元來葉の形状は千差萬別あつて小なるもの大なるもの薄きもの厚きものがあつてその何の故にかく差異があるかと云ふことは茲に述べる限りではないがその

葉の形状に依つて生理作用に影響を及ぼすから従つて之れが取扱ひに此點を考慮して水分を施す加減などをしなければならぬと云ふことは述べ置かねばならぬ。

(二) 莖の作用

すべて莖の作用としては枝や葉を高く廣く空中に捧げて成る可く日光や空氣に觸れるやうにするのが主なる働であつて兼ねて養液の通路をなすのである、云ふまでもなく植物の種類は千差萬別で従つて莖の長さも短きもの太きもの小きものなご種々あるけれども何れもその作用は同一である、松などの莖は植物の中でも極めて長大となる可き運命を持つておるのである庭園に植えたり盆栽にしたりするには山野に自生せるものゝやうにやたらに長大であつては元より不都合千萬でその觀賞の目的に添はないから特にその短小なものを撰

んだりまたは短小に仕立てるのである。

元來盆栽にする松のやうにその莖が十数年を経ても漸く一、二寸に充たないこと云ふのはこは主として海岸や岩上に自生して寒風や烈風のために常に腦まされて生育することの出来ないやうなものを掘り採り來たるのであつて幾ら數十丈の長さになる可き運命を有する莖でもその境遇に依つては如何に短小になるものであるか分るであらう。

松に限らずすべての植物はその境遇に應じてかくも非常なる變化を來たすものであるから面白いのである、盆栽や庭園樹として仕立てるのに趣味があるのである、同じ年數に一方は數十丈の長さとなり一方は一尺にも満たぬ短小なものとなるとは實に驚く可きことではないか、かく多大なる差異のある理由は分り易く云へば一方は境遇がよく一方はその反對に悪いと云ふことに歸するので

ある、之れ大に松の盆栽などを仕立てる際に應用すべきことで盆栽を仕立てると云ふことは云ひかへれば勝手に人の意に適するやうに枝を曲げたり葉をむしつたりしてやたらに植物をいじめつけるのである、大体に於てその生理に反することをを行ふのである、それが極端となれば松は或は枯死するに至ることもあるが要は枯死に至らざる程度に於て生理に反することを行ふてそが生長を抑制してその枝を曲げて以て人の意を充たすやうにするのである、松自身から云へば或は迷惑至極のことであらんかなれどもごうも仕方がない、人間の意のまゝに従ふより外に仕方がないのである。

すべて莖の内部には養液の循環する一定の通路があつて根から吸ひ上げられた養分も葉で同化されたる養液も此通路を通つて四方の枝や葉や莖や根に至つて各部を養ふておるのであるかゝる作用は普通の生育を遂げておる植物では可

成り強盛であるけれども盆栽ではその作用は極めて徐々に行はれておるので従つて莖や枝を傳ふて循環する養液の量も極めて僅少と云はねばならぬ人体に例えたならば所謂老成の域に達して身体の新陳代謝の極めて徐々たるものと同じであるから従つて之れを取扱ふ上に於ても手入をする上に於ても水分や養分を施す上に於ても極めて注意を要するのである

身体の強健であるものならば或は之れを放つて置いても左程に害を受けることはないかも知れないが身体の薄弱なるものに例ふ可き此盆栽は充分の手當を施さなければその健康を維持することが出来ずに終に枯死に至るのは免かれないことであるから此點に大に留意しなければならぬ。

(三) 根の作用

根の作用は云ふまでもなく養分を吸収するにあるのであるがその外植物体を地

上にしつかりと固定する作用を持つておる。何しろ數十丈の高さを有してその直径は數尺に達し枝葉之れに伴ふて四方に擴がれるやうな大木はその全体の重量を計算すると中々大したもののであるに違いない、ましてや之れに風が當り雨が當り雪が積もつたときなどの重さは中々少なからぬものである、その重さをじつと支さえて居る根は極めて頑強なものでなくてはならぬ、根の大部は地上に顯はれてはいないけれども地中に擴がつてかゝる重量のあるものを支えておるのである、所謂縁の下いほゆるゑんの力ちから持ちをしておるのである。かやうなことを考へ合はすと根の作用は中々大したもののである。

養分を吸収することゝそれから植物体を眞直ぐに地上に支えることゝ

之れ極めて重要な作用と云はねばならぬ、根があつてこそ植物は生育するのである、天下に葉のない植物のないと同じ様に根のない植物もないのである、巖

上に於ける松の根が蛇々として蛇の如く龍の如く蟠わだかまかまれるその様は雄々しくもまた頼もしきものではないか、巖上いわんじやうを這はひながら僅かの土と濕氣とを頼つて伸び行く松の根は中々に根氣の良よいものである。

巖の上にさへ生じ得る位に松は水分も養分も比較的少くして生育し得るのである、此點は松を培養する際に盆栽を仕立てる時分に大に参考としなければならぬ、乃すなはち水分なくして育ち得る植物はないにしても松などは極めて少量な水分で育ち得るものであるから水を多く施し過ぎたがために松の盆栽を枯らした場合は幾らもある。

以上は葉と莖と根との生理作用の大体を述べたものであるが之れ等は云ふまでもなく單獨に働くものでなくして相待つて相伴ふてその作用を營み以て全体の生育を遂げるのである。

すべて植物の形状や性状は千差萬別であるがその形状や性状は一つの植物について云へば葉の形状は根の作用に連關しひいて全体の生理に影響を及ぼすのである、例へば松はその葉が針状であるがために水分の發散作用が少なく従つてその根は水分を吸収することが少ないからかりに水分を多く施し過ぎると害がある云ふやうな關係が出来て来る、松が少量の水分で生育すると云ふのは全くその葉が針状であるし莖が堅き皮に由つて被はれてあるからである云ふやうな關係があると云ふことは植物培養に従事するものゝ心得置かねばならぬことである。

第二話 松の種類

松の種類は他の賞観植物に比して割合に多くない、元來松は他の觀賞植物

のやうに花や葉の珍奇なを貴ぶのでなくして主としてその枝振りや恰好を賞するのであるから従つて種類の多き必要がないからである、乃ほも觀賞の目的が大いに他のものと異なつておるから人工的に種類の改良を企てなかつた爲めである、それでは將來とても種類は増さないかと云ふと必ずしもさうでない、だんく人の嗜好が増進し松に對する嗜好の工合が變化するにつれてやはり種類を改良して葉の形状やその色合や乃至は皮の色澤などを變化させてその嗜好に應ずるやうにして世の愛松心を一層盛んならしむることは松を栽培するものゝ將に勉む可きことである、いや大に利益のあることであるから段々種類も増して来るであらう。

松は植物學上から云へば松柏科植物中の松屬に屬するもので主として温帯地方に産する常緑性の喬木である、松の葉は人も知る如く通常は二個種類に由

つては五個針狀に叢生しておつて花は單性で數花球狀に簇生して多數の雄蕊から成れる雄花は新芽の莖部に又雌花は多數の鱗狀の雌蕊から成つて新芽の頂端に開いておる、果實は卵形の毬果で多數の鱗片から成り俗に「松かさ」と稱へられておるものである、その種子には羽狀のものが附着しておつて風に從つて飛散して適當な場所に落ちて發芽生育する性狀を持つておる。

今普通本邦で知られておる種類について次に述べることにしやう。

(一) 赤松

赤松は又俗に雌松或は女松と稱えられ我邦の山野には自生せるものが多く到るところの山中に見出すことが出来る、自然の状態にては數十丈の高さに達する性狀を備えておる。

此赤松の特色とするところはその葉が短かくて細かくて軟かくて樹姿が温雅であつ

て園用樹として最も好適し多くの庭園に植へ込まれて愛す可き風姿を備へておるものである、従つて盆栽としても風致が遙かに黒松に優つて優雅の趣があつて松の種類中仕立てるのにも最も好適のものである。

また之れが利用の方面を少しく擧げて見やうならば赤松の材は建築用や器具用に供したり或は之れを伐截して燃料に用ゆることが多い、その材から分泌して出るところの松脂は薬用としては煉薬や膏薬の製劑に用ひたり或は工業用に用ひらるゝことも少くない、また彼の貴重せらるゝ所謂琥珀なるものは太古にあつた松脂が地中にあつて化成したものである。

松茸は主として赤松の根際に發生する一つの菌類であつてその發生せる様の如何にも可憐であつてそしてその味の美なることは茸の種類多しと雖ども之れに勝るものはないのである、従つてもしも庭園に松を栽えると共に松茸の種子

をも移して風雅なる松の枝下に愛らしき蕈の発生を見ることが出来るならば如何に趣味が深いことであろうか、松茸狩は昔から最も趣味多き山遊びの一つに數へられておつた、わざ／＼山に往かなくとも園庭の小高き一隅に松が枝の垂るゝところ居ながらにして松茸を見るなどは確かに女子供の興味を起すばかりではない、後園秋深くして松の露が人の涙と共に物の哀れを増さす時松の枯葉を履みにじりながらその香も高き松茸を探るの愉快は全く知る人ぞ知ると云ふより外はあるまい。

かく庭園に松と共に松茸の生育を計るなどは決して空想ではない、出来難いことではない、山に生ずるものが人の庭園には生ぜないと云ふ道理はない、いや近頃は松茸を人工的に培養することも大分人々が注意して來てその胞子の生育繁殖さへ計れば容易に生育させ得らるゝのである。

さて赤松はその性中々頑健なもので大抵の所ならば生育し得るものであるがその最も適するところは普通の壤土に砂質を帯びた土地が最も好適であるのだ、そして之れを栽ゆる地形は低湿なる地よりもなるべく高燥なる處を撰ぶのがよろしい、而して地中深く根を伸ばす性に富んで従つて土壤の深層にある養分をも吸ひ取るの力があるから比較的瘠薄なる砂濱や石礫の地にも能く生育するのである。

また前にも述べた通り元來其性状が少量の水分にて生育するものであるから岩上にもまたは高燥で水分に乏しい所にも能く生育し得るのである、此故に此赤松を庭園に植へる場合には大抵の所でも育つものであるから松自身に取つて生育上好都合のところを撰ぶよりも寧ろ庭園に取つて風致上好都合の場所何れえなりと植へて差支がない、たゞひその性が乾燥を好むものであつて

も低濕の地に植へてさへも差支がないのである。

(二) 黒松

黒松は前の赤松又は雌松に對して俗に男松と稱えられ又白芽松とも稱えられておる、一寸見たところでは無論赤松に似ておるがその異なるところは

赤松は樹皮が赤色を帯びておるに反して黒松は黒色を帯びておる

のでまた赤松の芽は赤色であるが黒松のは白色である、之れ白芽松と云ふ所以であつて又その材心も白色を帯びて且つ頗る脂氣に富んでおつて松香油と稱するものは主として此種から製するのである。

その樹の風姿は赤松に較べて遙かに剛健勇壯の趣がありその葉は堅く太く赤松のやうな温雅な點が少くないから盆栽用若くは庭園用としては或は見劣りがする傾きがあるけれどもその豪宕の壯觀を備ふるに至つては遠く他の植物の及

ばないところである。

その材質は赤松に較べると劣つておつて従つて製作用として左程に貴ばれない。

元來黒松は海濱に多く生せる種類で東海道の沿岸などには極めて多い、乃ちはその性が赤松と異なつて海濱のやうな濕氣の多いところに能く育ち海風に堪ゆるの特性がある、此故に海岸、河口等の地に栽植して防水や防砂の用となす場合が多い

黒松に適する土質はやはり赤松のやうに普通の壤土に砂質の勝てるものを好むのであるが一般に赤松よりも水分の多きを好むのであるから低濕地にて能く生育するのである、要するに赤松を山地や高燥地に産する松とすれば黒松は海岸や低地に産する松とす可きである、濱の松風を起すのは主として此黒松

である、遠州濱松は黒松が多いから起つた名であるに違いない、鎌倉や大磯や乃至は國府津などの海岸近くの別荘の庭に植ゆるには黒松でなければならぬ、四面海にて圍まれておる我邦はまたそが海岸線を黒松に由つて飾られておるのである、千年の緑を堪ゆる黒松が海邊の巨岩を控えてその勇壯剛健なる風姿を海の鏡に映せるその様は我日本島を守護する番兵にさも似ておるではないか、色黒き白き漁村の男女の「盆オドリ」はかゝる松の下で行はるゝのである。

(三) 姫小松

その名も可愛き姫小松は鬼の住むてう高山に多く産するのである、北海道千島を始めとして本州到るところの山岳や丘岡に多く自生しておるのである、その樹長は七八十尺に達するものもあるけれども風力の強いところに産せるものは多くは匍匐性を有しておる。

此松はまた五鬢松又は五鬚松と稱えてその葉が五針葉で細かくやゝ黒色を帯びて他の松類の葉に比すると短かい、其葉質は柔軟で振り曲つておる、その樹皮は嫩樹のときは緑色で後に黄褐色に變じて細鱗を其表に生ずるやうになる。此松はその樹姿が婉雅愛す可き趣きがあつて庭園樹として最も廣く稱揚せられ觀賞用として極めて好適なものである、又その樹長が餘り大きくならないで盆栽として赤松や黒松には遙かに勝つておる、此松は他の松に較べて變種が多い。

此松の材質は比較的柔軟緻密で従つて松屬の植物中では彫刻材として第一に位しておつて古代に於ては彫刻には多く此材を使用したものである、其他多くの器具の製作用又は漆器の木地や或は「マッチ」の軸木などに用ひらるゝ外建築材として使用せらるゝことも少くない。

此松はもと高山に産する位であるからやはり乾燥地を好みその性も頑健であつて大概の地に植えて生育しないと云ふことはないが主として砂土に適するのがある。

姫小松は遠洲濱松近傍の三方ヶ原に多く自生しておる。

(四)五葉松

此松は高山に自生しておるものであるが、通常は觀賞用として人の知るころである、樹長は自然の状態に於ては七八十尺に及ぶものもある。葉は名の示すやうに五針葉で濃綠色を呈し其裏面に白條がある、樹皮は赤褐色を帯びて其表面に大なる鱗片を有しておる、

此松の特色としてはその樹姿が頗る整然たることで黒松のやうな豪壯な點がなくとも或はまた赤松のやうな温雅な點がなくとも一糸亂れざるが如き行儀良き

その風姿は觀賞用として盆栽として床の間の飾りとして何となくそのゆかしさが忍ばれるのである、また此松は挿枝用として適當のものである、その材質は姫小松に類して種々の用に供せらるゝ。

五葉の松は他の松に比してその培養が六ヶ敷のである、その盆栽などは少しく不注意に放置して置くと往々枯死するのである、その適土としては普通の壤土で盆栽などにする場合にはその用ゆる土質に注意しないと往々不覺を取ることがある。

(五)這松

此松は通常風當り強き數千尺の高山に生ずるの性があつて従つて直立して成長することがなくその樹幹は常に平臥匍匐しておるのが常であるから此名を得たのである、その樹姿は一種他に異なつた風致を有して盆栽に仕立て、賞觀

して趣味多きものである、此松を育てるには細礫に富んだ砂土を用ゆるのがよい、そして性甚だしく乾燥を好むものであるから水分は極めて少量を施さねばならない。

(六)朝鮮松

此松は朝鮮に多く産するから此名があるのである、我邦には享保年間に朝鮮から輸入せられたものが漸次擴がつて以て今日に至つたのだと云ふ。

葉は大きくて長くまたその毬果は非常に大形で中華民国人や朝鮮人は此中にあつておる、之れを盆栽にしたものは一種の雅致を有し世人に賞観されておる、以上は松の主なる種類についてその大要を述べたものであるが右の外霜降松一名白松と稱へるものがあつて此ものはその葉に霜の降つたやうに白粉が掛つて

おるから名づけたものである。

また白松松、「スダレ松」など、云ふ名のももあり尚ほ大王松と云ふてその葉の極めて長く一尺七八寸位の長さのものがある、其他多行松、黄金多行松、萬代松、一葉松、折鶴松などの名稱のあるものもあるが之れ等は極めて少いのである。

右の外琉球に産する琉球松、臺灣に産する臺灣松などがあつて何れも東部亞細亞主として日本諸島の原産に屬するものである。

歐米諸國にて「パイン」と稱するものは我邦の松とは自からその種屬を異にしておるのであるが管手に此「パイン」なるもの、種類中で庭樹若くは盆栽として面白きものを少しく紹介して置かう。

「佛國海岸松」 海岸等の風強き地の瘦せたる處にも良く育つもので生長早く葉

が頗る長く三葉であつて樹姿が雄壯で庭木としてもよろしく海岸の防砂等に最も適當であつてその成長の早いことは松類中で蓋し之れに及ぶものはない。

「ストロブ」五葉松 日本の五葉松よりも其葉が長く柔かたで美麗である、一種の趣があつて庭木として最も好適なものである。其材も良材である。

「コルシカ」松 此松は一名「ナポレオン」松と稱へ「ナポレオン」第一世の生れたる「コルシカ」島の雄大なる松である。

「モンタナ」松 世界の公園と稱せらるる、瑞西國の産で材木に適し又庭木として良い。

「リギタ」松 米國の原産で三葉松で性強剛で四時移植に適し幹を切るも芽を生じ喬木となる性がある、材は赤松に似て成長が早い。

「オレゴン」松 此松はまた「アメリカ」松と稱えられて近來多く輸入せらるるも

ので庭木としても妙である。

第三話 松の土質

およそ植物を培養するには庭木にしる盆栽にしる先づ土質のことを述べなければならぬ、植物に取つては土地は頂度人間の家に於けると同じ關係があつて植物の本体である根は必ず土中に入つて生存しておるものであるから勢ひ土質のことを述べるのが先づ第一に必要となるのだ。

前に生理のところ述べてたやうに數十丈の長さに達す可き運命を有する頑健なる松は大概の土質のところ生育するから別に特に土質のことなどを述ぶる必要がなさうに思はれる、誠にその通りでもしも普通に生育さす可き松を培養するには一向その必要がないのだ、とても事實に於て土質を撰んで培養するな

どは出来難いことである。

然るに長大となる可きものを寸尺の長さに縮めて盆栽にする場合には松は生理上から云へばすでに非常に不具者となつてその自然の性状から餘程異なつて居つてその性は頑健の反對に甚だ虚弱のものとなつておるから従つて之れを培養し手入れをする場合にはその土質のことから生育上萬般のことに注意を要する次第である。

乃ちちすでに盆栽となつた松若くは盆栽に仕立てんとする松は自然の性状を離れた餘程性状の弱きものとして取扱はねばならぬので能く貴重なる盆栽の松の枯死することのあるのは全くその手入れ取扱いに缺けるところがあるからだ。此故に同じく松を培養するにしても庭園に植へ込む松と盆栽に仕立てる松とは大にその趣きを異にせなければならぬ、先づ茲には主として盆栽の松を標準と

してそが土質のことを述べることにする。

土質について先づ第一に考ふ可きは前にも述べたやうに土地は植物に取つては頂度人間の家のやうなものであると云ふことである。然らばその家にも例ふ可き土地は養分を植物に供給するの外すべて根の生育に資する條件例へば排水が佳良で空氣の流通がよいと適宜に水分を含むやうな性状と或は保温の作用があるとかすべて根の健康を維持し人間で云へば衛生に適すやうな状態でなければならぬのだ。

然らば如何なる土質が最も松に適するかと云ふことを述べる前にその根の作用のことを述べなければならぬ、根の作用のことは前の生理のところでも一寸述べたのであるが土質との關係を明らかにするについて尙少しく述ぶるの必要がある。

先づ第一に述べ可きことは根は呼吸作用を営むと云ふことである、呼吸作用は乃ち人間の呼吸を同じことですべて生物は高等のものでも下等のものでも生活力のある間は必ず此作用を営むものである、いや呼吸作用に由つて生命が維持されるのである、呼吸作用は空氣中の酸素を吸収して炭酸瓦斯を吐き出す作用を云ふのでその點は動物も植物も變りがない、兎に角根が呼吸作用を営む以上は空氣を要するから土中には常に空氣が流通しておらねばならぬのだ、粘質なる土壤には或は空氣の流通が全くない場合があつてかゝる土壤には植物は生育しないのである、植物が能く生育しその生命を維持して行くには必ず土中に空氣の流通を要するのである、すべて盆栽に用ゆる鉢はその底に穴が開いてあるのは全く此空氣の流通を能くするためと適宜に排水をさすためである。

元來植物を盆栽にした場合にはその根は幾ら伸長しやうと思つても一定の狭まき區域に制限せられて伸びることが出来ないから勢ひその生活力も強勢でない乃ち松などの山野に勝手に自由自在に幹も根も伸びほうだいに蔓延しておるものに較べると病的状態にあるのである、従つて病人を容れる病室のやうに盆栽の松を植へる土質は清潔に空氣の流通がよろしく根をして氣持よくあらしむるやうなものでなくてはならぬ。

さてかゝる目的を達する土質は如何なるものがよきやと云ふに左の配合土に及ぶものはない。

畑土四分

細砂三分

燐炭三分

右のものを能く細かに混じて之れを鉢植の際に用ゆるのである、畑土とは普通の壤土の細かに碎ひたものを用ひ細砂は成る可く細かいのがよい。

それから燻炭のことであるがこは少しく詳細に述べる必要があるから後の話に述べることにする要するに右の配合土は松の盆栽に極めて好適のもので土中に空氣の流通を良くし排水を佳良にすると同時に根を強健に維持する作用を

有して病的性狀を有する盆栽の根に取つては極めて有効のものである、何故に右の配合土が松の盆栽に最も好適であるかと云ふにこは主として砂と燻炭の効に由ることが多いのである、燻炭のことは後に述べることにして砂のことは茲に少しく述べなければならぬ、砂は何れの草花を植へるにしても盆栽を仕立てるにしても必ず多少之れを用ひないことはないもので従つて砂質は多少撰擇するの必要がある、同じく砂と云ふても荒きものもあり細かいものもありまたその存在する位置に由つて自からその性狀に差異のあるのは免かれぬことであ

る。元來砂は岩石の崩壊して生じたもので砂の一層細かになつたものが乃ち土である、従つてその母岩の性狀に應じて大に砂の性質の異なるのは云ふまでことである、されば松の盆栽には如何なる砂が良きかと云ふと

一般に海岸の砂よりも川砂の方がよろしく流れに従つて自然に河岸に寄り集まつたる少しく黒味を帯びた細かき砂

を最も良しとするので成る可く上流のものを良しとするのである。

能く盆栽に肥土を用ゆるを良しとするものあれども松などには決してかゝる必要はない養分は肥料として施すから別に土壤に初から含んでおる必要がない。また盆栽に用むる土に種々な名稱を附して種々なる場所から取り來つた土壤がよいとかと稱へて色々の説を唱へる人があるが燻炭を用ひる場合には決してさ

る必要がない、前に述べたやうに普通の畑の壤土を用ゆるがよい、壤土など云ふと六ヶ敷やうであるが單に普通の細かな庭の土でもよいのである、元來多く土質を撰ぶのは從來養分との關係から來つたものであるが養分は肥料として如何やうな分量にでも如何やうな工合にでも施すことが出来るから決して養分の關係から土質を撰ぶ必要はないのである。

前に述べたやうに大抵の植物に適する土質としては

排水佳良で空氣の流通が良く適宜に水分と温度とを保有し得る細かな土

であつて松にもやはりかゝる土質を最も良しとするのである、松などのやうに葉が針狀であつて水分の發散が少なく従つて根から吸收する水分が少量で宜しく多きに過ぎると却つて害があると云ふやうな植物では尙更ら排水の佳良な土質でなくてはならぬ、排水が佳良で適宜に保温の作用さへあればそれでよいのである。

である。

松の盆栽の枯死するのは全く排水が佳良でなく水分の滯滯するやうなことから起る場合が多い、さりとて水分があまり少きに過ぎても元より悪しき結果を來たすので要は施されたる水分は適宜に透過して根に適宜な分量の水分を何時も保有するやうな土質がよいのである。

第四話 松と燻炭

燻炭があらゆる植物に偉大の効のあることは數年來余の主唱にかゝり多くの人に由つて確實に實驗證明せられ今や農業界の一大問題となつて來た、元來燻炭の効のあることは實は昔しから唱へ來つたもので蘭や其他の植物の盆栽にも應用せられたことがあつた然かし確實にその効が認められて廣く應用せらるゝ

に至つたのは近頃が始めてある、元來燻炭はすべての植物に對して偉大の効がある、稲でも麥でも蔬菜でも草花でも花卉でも松にでも竹にでも梅にでも非凡の効があるから面白い、此故に余は此等すべての植物を培養するに當て、必ず此燻炭を用ひらるゝことを人々に勸めるのである、何故に此燻炭が偉大の効があるかと云ふことは後に述ぶることにして先づ燻炭の製法をざつと述べることにする、近頃はすでに燻炭園藝肥料なるものも發賣せられてはおるが此燻炭は容易に誰にも出来るのであるから少しく多量に必要な場合には自分で造るのがよいのである。

さて燻炭の原料としては藁を始めとして落葉でも何んでも庭の蘆芥でも火に燃ゆるものならばどんなものでもよいので之を焼いて炭にするには單に地上で火を付けたとてそれでは炭にならずに灰になる灰になつてはその効能は非常に

減するのであるからいけない、然らば簡單に炭に焼く法はどうかと云ふと先づ穴を掘るのである、乃ち適宜の所に直徑四尺深さ四尺位の穴を掘つてその周圍に焼く可き材料を積み重ね置き次に一束の藁に火を付けて穴の中に落すとばつと燃へ上るのである、そうするとその火を燃へ上らさぬやうに豫め用意せる細き長き竹の先の尖つたもので徐々に周圍に積み重ねてある藁を掻き落すのでその要は火の燃へ上らぬ程度、さればとてあまり火の燃へが少なくて消へないやうな工合に徐々に周圍の藁の中に掻き落とす穴がだん／＼に一杯になるからそうすると今度は上から藁か藁の長きものゝ水に十分に濕したものを被ふて火を蒸し消しにするのである、かくて二、三時間そのまゝにして置く中藁は全く充分に炭になるのである、此の焼く時分に落葉や蘆芥ならば充分に乾燥し藁ならば一尺位の長さに切つて焼くと焼くのに都合がよい。

此法に由りさへすれば誰にでも容易に燻炭を作ることが出来て松に限らずすべての盆栽を培養する人は是非知り置くべき法でかくして作つた燻炭を使ひさへすれば盆栽でも何でも何れの植物も意のままに培養することが出来るのであるかくして造つた燻炭に肥料分を混合したり吸収させたものは所謂燻炭肥料と稱へて植物に施して偉大の効があるのである、松でも盆栽にしたものに限らず庭に植へ込んだものに施してもその効は偉大である、之の肥料を施した松はその生育が非常に佳良であるばかりでなくその葉の色などは實に立派なるのである、乃ち其綠色は濃くなり光澤は多くなり生々として見るから氣持良きものとなるのである。

さて何故に燻炭や燻炭肥料の効能が偉大であるかと云ふことを説明して参考に供しやう、先づ第一に燻炭が植物の生育上大なる効のある理はその肥養分を吸

收する力を持つておるからである、炭がその性として諸種のものを吸収することとは人々の知れるところであるが植物の肥養分となる可きものを吸収保存して徐々に植物の根に供給する作用を持つておるのである、従來便所其他の不潔の場所の臭氣を止めるために木炭の粉末を用ひて完全にその目的を達しつゝあつたことは多くの人の知れるところであるが此糞尿其他有機物の腐敗から來る臭氣は乃ち植物に取つては結好なる肥料分であるのである、之れを見ても炭が如何に肥料分を吸収するか分るではないか、此炭が肥料分を吸収保有して徐々に植物に供給すると云ふことだけでも偉大の効があるのに加ふるに炭はまた温度を吸収すると云ふ植物に取つて効多き作用を持つておるのである。

黒色のものが太陽の熱を吸ふ位のこととは何人も知るところであるやうに此燻炭も温氣を吸ふ力が強いのである、之れについて余の實驗に由ると施した方の温

度は八十八度施さぬ方は八十三度であつた。此五度の差は以て作物の生育をどれだけの程度に助けるかは今數理的に示せぬが要するに植物の生育と温度とは密接の關係があつて或は肥料の養分以上に植物の生育を助けるかとも思はれる。云ふのは簡單な例だが地球が太陽から受くる温度が多きに過ぎたがために植物の生育を害したと云ふ例を見ない、温度が高い程植物の發育がよいと云ふことは熱帶地方に於ける植物が四季を通じて花を開き實を結ぶ有様を見ても分る。又温室で自由に何れの季節にも植物の栽培が出来るのは決して肥料分だけのためでなくて温度を與へるがために冬苺や西瓜の實が結ぶのである、昔饑饉年は何のために起つたかと尋ねて見ると主として温度の不足からである、土用の六月に袴を着るやうな年は必ず大饑饉であつた、温度と植物の關係は實に從來の學者の考へた以上の物があると云はねばならぬ特に植物の根は總ての生物の働

きと同じく温度が高ければ高い程吸収力を増すから其根に燻炭肥料を施すと燻炭の吸収する温度が其生育を助ける事は實に驚く可きものがあるに違ひがない、次に燻炭は之れを土地特に粘土質の土地に施せば其質を膨軟にして空氣の流通を良くし植物の根の發育を促す働きがある之れ亦見逃すべからざる大なる効力で近來頻りに各地で行はれておる排水の效果の擧がるのは全く之れと同じ理に基づくのである。

此故に燻炭は植物の根の働きを促がしそれが發育を助けると云ふ作用を持つておるのである、元來根は呼吸作用を行ふために土中に空氣の流通の良きを欲するのである、空氣の流通を良くするには土地を膨軟にしなくてはならない、土地を膨軟にするには燻炭に如くものはない、されば燻炭は直接間接に根の作用を促がし以てそれが發育を助ける作用があると云ふことが理解されるではないか、

また根は土壤の状態に依り自己に有害なる有機酸を分泌する作用を持つておる
 ところで燐炭はかゝる有機酸を吸収無害にする作用を持つておるから之れを施
 した場合には如何に根が燐炭の効果に浴するかわ分るのであろう。

右は燐炭が肥料に對しまた作物自身に對して有する効能の大要を述べたのであ
 るが尙ほ之れ以外の種々の効果を述べれば澤山あるが以上述べた丈けでも燐炭
 の効能の偉大であると云ふこと、従つて燐炭肥料の効能の偉大であると云ふこ
 とが讀者に合點が行かうと思はるゝ。

以上は燐炭の製法とそれからそのすべての植物に對して偉大の効ある理の大要
 を述べたものであるがさて松若くは盆栽にした松に對しては如何の効があるか
 と云ふことを述べなければならぬ。

庭に植へる松の根の周圍に溝を掘つてその中に燐炭肥料を入れて上から少しの

土を被ふて多くの果樹に肥料を施す場合のやうにすると松は先づ葉の色を増し
 て濃き綠色となり光澤を増し勢ひなき松はその勢ひを増し枯れかゝつたもの
 は生々するやうになり幾らその枝振をため直しても少しの害をも受くることな
 くますます盛んに生育するやうになるのである。

また燐炭を施すと松を植へてその根際からすつかり「セメント」で塗り固めても
 差支へがない乃はち「セメント」で塗り固めた路傍に植へても差支へがないと云
 ふのである近來獨逸では大道の兩側の石や「セメント」で固めた所へ少しの空地
 をも残すに並木を植へてあるそうだが、之れはその根の所へ木炭末が多量に施
 してあつてかくすると根際に少しの空地を與へないでも植物は良く生育するか
 らである、乃はち彼の東京の銀座街頭の兩側に植へてある並木の根際には必ず
 空地が與へてあつて之れなしには植物は生育することは來出ないとせられてお

つた、ところが煙炭をその根に充分に與へて置くとかく空地を殘し置くことなしに植物は生育すると云ふのである、こは近頃獨逸に於て發見せられ且つ實行せられておるので煙炭の効能は計らずも近來になつて獨逸でも明らかになつた次第である。

してみると尙も日光の當るところならば何れの場所でも水分がありさへすれば煙炭を施せば松は生育することが出来るのである、此故に庭園に松を植へ込む場合なども土質の關係に重きを置くよりかその配置上好都合の場所かまたは好風景を來たす可き場所に植へることを考へさへすればよいのである、乃はち松は煙炭を施しさへすれば大概の土質の所ならば生育するのである、枯死すると云ふやうなことは決してないのである。

かくも煙炭が松やその他の植物に非常の効のあるのは前に述べたやうな理由の

外に特に盆栽の松などに効が多いと云ふのは元來松の如き植物はその根から自己には有害である一種の有機酸類を分泌することの多いものであるが煙炭は實にこの有機酸を吸收分解して無害にするからである、普通の土地でも多少は此有機酸を吸收無害にする効はあるが煙炭はその効が非常に多いのである。

松の盆栽に煙炭を施しさへすれば殆んど枯死すると云ふことはないのである、元來植物の枯死は早衰のために水分の供給がないのと根が腐敗するのと二種の原因に基づく場合が多いのであるが盆栽は人工で水分を施すのであるから水分不足のために枯死すると云ふやうなことは先づないと云ふてよい、あつてもそれは極めて稀れであること云ふてよい、此故に盆栽の枯死するのは主として根を害せらるゝからだ、その根の害せらるゝのは主として自己に有害なる有機酸の分量の多きに過ぎるのに由る場合が多い、此故に煙炭を施して之れを吸收分

解せしめたならばその害を除き従つて松の枯死を免かるゝことは見易きことではあるまいか、松の盆栽と燻炭之れ正に離る可からざるものである、いや盆栽には必ず燻炭を使用せねばならぬのだ。

元來盆栽を仕立てる際にはその植物の生育を制限することは云ふものゝ一方に生育を計つて他方に之れを止めると云ふ矛盾した方法を取るのが必要なのであると云ふのは只むやみにその生育を止めんとすればその植物は終に枯死するに至るのである、此故に一方は生育を計り他方にてはそのつりあいを取つて通常の植物の生育することは趣きを異にする方法乃ち丈けは延ばなくもその幹をばたくさすとか或はその皮を厚くさすとか云ふやうな方法を取るのである、丈けを延さぬやうにしたならば自然生理を害せらるゝから普通の場合のやうにはその幹の大きさを増すことは出来ない、然かし上に生長する勢力は自然に幹に向ふ

から比較的幹が大きくなりその皮が厚くなると云ふものである。

要するに盆栽を仕立てるにはむやみにその生長を制限するのではなくして一方に生育を計つて或る度以上は之れを制限してその生長の方向を人意で好む方向に向けるので例へば幹の大なるを欲すとか根の張りを要すとか或は皮の堅きを欲すとかと云ふやうにそれゝその欲する方向に樹の勢力を向けるのであるから盆栽とてやはりその生育を盛んならしむる必要のあるのは普通の植物と撰むところは無い。

此故に燻炭や肥料などを施してその生育を欲することは或る程度迄は他の植物の生育を計るのと異なることはない。

第五話 松と肥料

肥料は植物に採つては人間の食物に當るものであるからその必要なるは云ふまでもないことである、山野に自生する草木が別に人から肥料を施してもらつたことなきも尚ほ能く生育するのは之れ肥料を要しないがためではなくして年々自然に落ちる落葉や或はそこら近邊の草類が枯死し腐朽して養分となるからである元來自生する草木はその性狀が培養せられておるものよりも一層強健であるから従つてその根もむやみと蔓延してそこら近邊から養分を吸ひ取る作用が多いけれども培養されたる植物例へば松でみれば庭に植へられたるものとなる自然の落葉から肥養分を受くると云ふこともなくまたその性狀とても自然のまゝに山野に生育しておつた場合よりも養分が弱くなつておるから従つて肥料とし

て養分を施さない或は枯死する場合がないとも限らぬ。況んや盆栽にした松は動物に例へてみると頂度籠の鳥のやうなものであるから他から餌を與へねばならぬやうに肥料をも施さねばならない、ところで植物の種類も多く肥料の種類も中々に多いのであるが松にはどんな肥料が適するか如何なる時期にどんな風に施すがよいかとか云ふことを述ぶるのが此話の主意である特に松を盆栽にした場合には如何に肥料だからとて悪臭紛々たるものを施してそれを床の間に据へ置くこと出来ない。例へば人糞尿や油糟の腐熟したものが松の生育を助けるからとてその臭氣をかまわずに之れを施して室内に容れるわけには行かぬ、かくては衛生上害があるばかりでなく盆栽そのもの、目的に反するではないか、如何に高尚な立派な盆栽でも悪臭鼻を突いては面白くない、芳香なる香水が賣られるのは何の故であ

るか世の進むに従ひ人間の五官の發達するに従ひ鼻は尙ほ眼の如く鋭敏に物を見別けるいや嗅ぎ別ける力を持つて來る、此故に世の進むに従ひ人智の發達するに伴なつて香氣と云ふことは日常生活上極めて重要な位置を占むるやうになるのは自然の勢である。

されば盆栽の肥料はその臭氣の有無善惡に重きを置かねばならぬ、もしも肥料にして惡臭の伴はないもの乃ほち惡臭のない肥料が此世にないとしたならば仕方がないが現に無臭にして然かも効多き肥料がありまた惡臭ある肥料でもその臭氣を止めて用ゆる方法があるから之れ等を研究してなる可く惡臭を除くやうにするのが必要である、もしも愉快なる芳香高き肥料があるとしたならばこは盆栽肥料として理想的のものであるかも知れないが現今ではかゝるものがない。且つまた盆栽の肥料は畑に作る農作物の肥料とは事違ひその分量は極めて少量

でよろしく従つて比較的價の高いものでも差支へがないから成る可くは價に關係なく無臭で然かも効多き肥料を撰ぶのが肝要である。

然らば如何なる種類の肥料が最も効多しとして便宜上良きかと云ふにそは次に順を追うて述ぶる種類である尙ほ茲に述べ置くことは松の盆栽の肥料とても中々輕々しく見過ごす可きものでなく肥料の工合に由つて大にその生氣を増し従つて一段とその風姿を引き立てることは中々に夥たしいものである、況んや盆栽に依つてはその價も中々高きものもあるに依つて之れ等の肥料については充分に注意を拂ふ必要がある。

(一) 智利硝石

智利硝石は天然に南米「ペルー」及び「ポリビヤ」等に産するもので主として智利に産するから此名があるのだ。

此ものは以前から多少輸入されたものであるが近來は非常の勢を以て年々我邦に輸入さるゝ分量が増してゐる、此ものは少しく赤褐色を帯びたる乃至は白色で水に溶解し易き無臭の結晶粉末で多量の窒素分を含んで草花肥料としてはその無臭と云ふのが非常な良適な次第である、従つて取扱ひに便利で清潔で他の肥料の企て及ばない點がある加ふるにその價も比較的安いから將來ますます園藝上に使用するに至るであらうから少しく委しく之れに就きて述べやう、此智利硝石の起原については未だ確説がないけれども現今二様の説がある、其一は智利硝石の堆積せる地盤の低いとその岩層中に沃素を含有するとの理由から此礦物は海岸に繁茂した海藻の類が堆積して出来たものであると云ふのその他の説は南米の海岸では海鳥糞の堆積が多いから硝石は海鳥糞から化生したものであると云ふのである。

智利硝石は岩層をなして堆積して居るもので此岩層を「カリケ」と名づけて之れは硝酸曹達の外に種々の夾雜物を含んでおるので次のやうな成分を持つておる (百分中)

- 土砂や礫等の不純物 五〇、〇〇
- 純粹の硝酸曹達 三五、〇〇
- 苦土曹達及び石灰の鹽化物 一〇、〇〇
- 硫酸鹽其他の鹽類 五、〇〇

智利硝石は百分中平均十五「パーセント」の窒素を含み其窒素は硝酸の形態で存在するから溶け易く直ちに植物の吸収に適するものである、また之れを土壤に施すと幾分か根切虫の害を豫防するの效があると云ふことだ、されどもその性質として濕氣を吸収し易く土壤を固結さす傾があるばかりでなく元來硝酸は土

壤に吸収せらるゝ力がない故直ちに之れを施すことなく前に述べたところの燐炭に吸収さして施すと其效が多く盆栽や草花肥料として無臭の點と取扱いに奇麗であるとか云ふ點があるので第一位に置くべきものと云ふてよい。すでに植へ込みたる松の盆栽などに之れを施すにはその十匁を四升位の水に溶解したものを直ちに施してもよろしく乃はち水分を施すところえ此液肥を施すのがよいのである、然かし之れは何時も施す可きものではなく自からその時期があるのでその時期については後に述べることにする。要するに智利硝石に適宜に過燐酸石灰や加里肥料を配合したものは園藝肥料として至極適當なもので多く世間で園藝草花肥料などとして販賣しておるものは何れも之れ等の肥料を配合したものに過ぎない、只その配合の割合は草花や盆栽の種類に由つて各々異にせなければならぬから彼の市場で賣つておるもの

を何れの盆栽や草花に施しても適當であると云ふことは出来ないから種々その植物の特性に應じて施さなければならぬ。

(二) 硫酸「アムモニア」

此ものはその純粹のものは無色透明の結晶であるが通常肥料として賣つておるものは灰色やら又は黄色青色を帯びたものである。

硫酸「アムモニア」は前の智利硝石のやうに結晶物であつて其臭氣としても惡臭でないから盆栽や草花肥料として適當なものである、やはり配合肥料の原料に多く用ひられておる、硫酸「アムモニア」は主として石炭瓦斯製造の際に副産物として多量に産出せらるゝもので元來石炭は通常「バアーセント」内外の窒素を含んでおるもので此窒素は石炭乾留の際に「アムモニア」に變じて發散して瓦斯洗滌用の水に溶解するから此水に硫酸を加へて酸性とし蒸發して得た殘滓に

更らに生石灰を加へて蒸餾すると「アムモニア」は瓦斯となつて發散するから之れを硫酸液中に通ずると硫酸「アンモニア」が出来るのである。
かやうにして製した結晶性「アンモニウム」の成分は次のやうである。

水分 窒素 石灰 鹽素 硫酸

四、〇 二〇、〇 〇、五 一、四 五八、〇

近來は我邦で人糞尿から此ものを製する法を發明して現に東京府下で從事して
おる、また東京市中に日々出来る蘆芥の類にもやはり窒素分を含んでおるから
之れを焼いて生ずる烟中にある窒素より或る方法に由つて硫酸「アンモニア」を
製することも出来て大に廢物利用の途が講せらるゝのである。
現今での我邦の産額は甚だ少なくて主に外國から輸入しておる次第であるが將
來はだんだん我邦でも多量に産せらるゝやうになるであらう。

硫酸「アムモニア」の品質の良否を鑑定するにはその少しを採つて白金板上で
灼熱するので質のよいものは熱のために揮發して少しも滓が残らないけれども
不良の品になると滓が多く残るから容易く區別がつく。

硫酸「アムモニア」は智利硝石に次いで効驗の速かな肥料であるがやはり智利硝
石のやうに窒素分ばかりを含んでおるのであるから之れを單獨に用ゆることは
良くない必ず磷酸や加里肥料を加味して施すがよい、之れを施す際にはその十
分を二升位の水に溶解して液肥として施すのがよい、頂度此割合は人糞尿の含
める窒素の量に相當するのである。

(三) 硝酸加里

此ものはまた硝石と稱へられて窒素と加里の二成分を含んでおるから之等の二
成分を同時に植物に供給することが出来て誠に都合のよい好肥料であるけれども

もその價格が高いから一般作物の肥料とするには少し不適當である、然かし松の盆栽や其他の草花栽培などのやうな集約的の仕事には多量を要するものではない従つて價が高いからとてそれに左程重きを置くに及ばないから之れを用いて誠に適當と云はねばならぬ。

之れを施す方法は智利硝石と略ぼ同様でよろしく價の高きを問はずに只植物の生育のよくなるのを目的とするとか或は品評會に出すために逸品を作り出すとか云ふ場合には此硝石を用ゆるにこしたことはない、特に之れが水溶液(水四升に硝石十匁の割)を煖炭に吸収したもののなどはその効驗實に著しく恐らくかゝる肥料に及ぶものは他にない、園藝肥料として世中に多く販賣せらるゝものゝ内で少しく高價で良好なものには必ず多少の硝石が混じてあるのだ。

(四) 過磷酸石灰

過磷酸石灰は近來磷酸肥料として廣く用ひらるゝものでその植物生育上に大効のあることは一般に認められておるものである、此ものは普通磷酸石に硫酸を注いで製せらるゝもので先づ磷酸石を砕いて之れに硫酸を注いで攪拌すると直ちに化學變化が起つて過磷酸石灰が出来るのである、また過磷酸石灰の原料には磷酸質海鳥糞骨炭骨灰獸骨などを使うこともある。

過磷酸石灰は何れの作物にも有効であつて盆栽や草花肥料としても臭氣のないことゝ取扱ひに便利な點から適當であるばかりでなく之れを使用すること花を多く開きその色澤は艶麗となること著しい。

過磷酸石灰は之れを施す際には必ず他の窒素肥料や加里肥料と適宜配合して施す可きもので松に施す場合には智利硝石とか硝酸加里とかと配合して之れを水溶液として施すのがよい、尙ほ此過磷酸石灰を加味したる際には必ず根や葉に

直接に觸れないやうにして施さねばならない。

過磷酸石灰の色合は濃淡種々あれども毫もその成分とは關係がないのである、さればその品質の良否は外觀上から區別することが困難であるから其肥料成分の多少を知るには化學的分拆に由るの外に法はない、然かし一般に其性が膨軟で粉末となり易く濕潤で粘氣があつて固まらないのが良品である。

過磷酸石灰には時としては土砂を混じて不正品を作ることが多い之れを検出する法を一寸述べて置かう、先づ供試品の五乃至十「グラム」を「ピーカー」に採り少量の稀鹽酸を加えて煮沸し水や酸に溶け難き硫酸石灰を除去するため多量の水を數回繰り返して洗つて硫酸や石灰の反應がないやうにすると後に土砂のみが残るからその量に依つて混合物の多少を知るのである。

(五) 加里質肥料

加里肥料としては炭酸加里、硝酸加里、硫酸加里などの種々あれども本邦で最も普通でそして經濟的のものは草木灰である、然るに近來獨逸國「スタツフルト」で天然の加里礫石が発見せられて盛んに採掘せられて之れを肥料に施用するに至つた。

該地方で産出する加里鹽には種々あれどもその主なるものを擧ぐると

「カルナリツト」 「カイニツト」 「シルビン」 「ポリハライト」

「シルビニツト」

などで我邦にも輸入せられて居り盆栽肥料として最も好適のものである。

(六) 灰類

灰は主として加里分を含み又磷酸や石灰をも含むから肥料として効の多いもので松に用ひてもその効が元より多い。

また灰は直接に肥料として効があるばかりでなく油槽のやうな脂肪分の多いものに混ざると其脂肪を脱却することが出来るし又酒精や「アルコール」糖などのやうな酸味を帯べる肥料に混ざると其有機酸を中和するの効があるから此等の肥料と混用すると効が多い、然かし灰類の成分は其原料である植物の種類によつて異なるは勿論また同種の植物でも其部分を異にするに由つて多少の差異のあるものであるから灰を用ゆる場合には之等に注意することが肝要である、一般に針葉樹の灰は潤葉樹の灰に比べて養分が乏しく稿稈類の灰は針葉樹の灰と較べて更に劣つておるやうだ。

灰を使用するについて注意すべきことは灰は「アルカリ」性のものであるから之れを腐敗せる有機肥料又は「アンモニア」性の肥料に直接に混用すると「アンモニア」を揮散するの虞があるからかかる場合には別々に施すか或は混和した後

直ちに施して覆土するのがよろしい、それから灰分の加里は主に炭酸加里の状態で存在して水に溶解し易いものであるから灰を貯蔵する場合には必ず雨露を防ぐの設備をなすことが肝要である、今灰の成分を示すと(百分中)

品名	水分	石灰	磷酸	加里
落葉樹灰	五、〇〇	三〇、〇〇	三、五〇	一〇、〇〇
針葉樹灰	五、〇〇	三五、〇〇	二、五〇	六、〇〇
多數の平均	四、一〇	三〇、三〇	三、九〇	一一、七〇
稿稈灰(平均)	三、一〇	二、三〇	二、一〇	四、五〇
落葉灰(平均)	五、一〇	五、八〇	三、九〇	四、四〇

(七) 硫酸鐵

硫酸鐵は直接間接に肥料として効多きものである、元來鐵は土中到處ところ

に多量にあるもので従つて肥料として價値なきものとせられておつたがそうでないやうだ、現に植物に鐵を施すと速かに葉は深綠色を呈して來り花は一層色澤を帯びて來るのを實驗した、恐らく鐵分は將來園藝草花肥料として有用なる一成分となるであらう。

また硫酸鐵は盆栽其他の植物の種々の原因からして勢ひがなくなつて枯死に瀕したやうな場合にその稀薄な溶液を施すとその勢を恢復するの効がある、また樹木の盆栽を仕立てるに此肥料を用ゆると木は丈が延びずに丈夫に育つ傾がある。

(八)油糟

油糟とは菜種、大豆、綿、胡麻、亞麻などのやうな脂油に富める種子から油分を搾り取つた殘糟を云ふもので大概窒素分に富んで盆栽培養上或は草花栽培

上從來廣く使用されたもので中にも需要の最も多いのは大豆糟と菜種糟である、油糟は成る可く油分の少きものを選ぶのがよろしく、すべて施す前によく搗き碎いて粉末としてそのまま用ゆることがあれども多くは積みて堆肥に混じて適宜に醱酵して後施すのがよろしく特に油分の多いものには草木灰を混じて醱酵させるのがよろしい、概して油糟は醱酵作用が激しく蒸熱の發生することが強いから其まゝ應用するときは往々種實の發芽力を害したり或は作物の幼根を害するの虞があるから之れを施用するに當つて注意することが肝要である。

大豆糟は普通の菜種油糟に比して窒素を含む量が多いけれども磷酸を含むことが割合に少いから之れを施用する際には適當の磷酸を含める肥料と加味して施さねばならない。

菜種油糟は油糟の中で大豆糟に次で其産額が多く含めるところのみ成分の配合

の比例が適度を得ておるから盆栽や各種の草花に使つて決して失敗を招くやうなことはない、どんな素人が用ひても危険の患がなくてよい、松の肥料としても元より良好である。

油精は大豆精を除くの外は性質上不正の雑物を混合しても一寸分らないから従つて不正賈造の品が多くその混ぜ物の主なるものは土壤木皮鋸屑、柿の澁精などで支那から輸入した油精には常に泥砂の混じておるものが多いからよく注意をしなければならぬ、今参考のために油精の成分を示すと

種 類	水分	有機物	窒素	磷酸	加里
菜種油精	一一、三	八三、〇	五、〇五	二、〇〇	一、三〇
蠶豆油精	一〇、三	八〇、九	七、六七	一、一〇	一、五八
棉實精	一一、二	八二、二	六、二一	三、〇五	一、五八

胡麻精	一一、一	七九、六	五、八六	三、二七	一、四五
亞麻仁油精	一二、二	八二、七	四、七二	一、六二	一、二五
檀玉油精	一五、〇	八二、〇	一、一六	〇、四三	〇、七七
豆子玉	一一、六	八三、六	四、六	一、九〇	一、二一
落花生精	一〇、四	八五、六	七、五六	一、三七	一、五一

以上述べ來つた肥料の種類は主として庭園の松や盆栽の松何れにも有効であるものについてその一般の性状を述べ來つたものであるが之れ主として松自身に有効であると共にその臭氣の少なきもの乃ち盆栽肥料として適當のものを舉げたのである。

然かし人糞尿や堆肥などは元來自然に備はつた植物の好肥料で従つて松にも場合に由つては何れの肥料よりも有効のことがある、此故に盆栽にして非常に衰

弱して枯死に瀕した場合は庭に出して人糞尿を施し置くなど好結果を來たす場合もある。

第六話 施肥の方法

前話に述べたところのものは主として松に用ゆる肥料の種類について述べたものであるがさてその肥料を如何にして如何なる時期に如何なる分量にて施すかよきやと云ふことについて茲に述べねばならぬ。

従來庭の松若くは盆栽の松に施す肥料についてはあまり重きを置かなかつたものであつたがだん／＼園藝思想が發達するにつれて松に對してもその賞觀の趣味が増して來て從つて之れが培養の方法に重きを置きそが逸品を出すを勉むるやうになつたのは斯道一段の進歩と云はねばならぬ。

およそ何れの植物を問はず之れが培養の第一歩は先づ肥料のことである、肥料は植物の食物であつて之れなしには到底生育することが出來ない、庭園に植えられたる松のことは暫く置き前にも述べたやうな病的の性状を有する盆栽の松とてもそが食物たる肥料を要することは云ふまでもないことで頂度人間の病人には牛乳や卵のやうな滋養分が必要であるかのやうに病的の松の盆栽はまた一層滋養となる可き良好な肥料を要するのである、而して吾々の病人には食物を制限して一定の分量を定めて與へる必要のあると同じやうに病的の松の盆栽にも普通の状態にある植物と異なつてその施す分量にも一定の制限を定めて與へないと盆栽たるの目的を達することが出來ない、乃ち假りに肥料をあまり多く施し過ぎるとその生長の度が過ぎるがためにそが風姿を損じたり或は之れを仕立てるのに却つて不都合になる場合がある。

元來松の盆栽は逸品を仕立て上げるには少くとも十五、六年を要したものだ、然かし之れは從來の話で以前かく十数年かゝつて仕立てたものをそれと同じ位の程度のもを十年か或はそれ以内甚だしきは五、六年間に仕立て上げるのが學理應用の妙味のあるところである、肥料の施し加減に由つては數年間にして尙ほ能く十数年若くはそれ以上を経過して漸く作り上げたものであるやうに見せ掛けることが出来るのであるいや年數を経たと同様なる結果に仕立て上げる

ことが出来るのである。盆栽の妙味は種々の點にあるのであるが要するにその姿が年數を経た老木であるかのやうに見へるのには人々の一致するところである、數十里に亘る景色をさへ僅か一尺四方に足らぬ位の小面積に縮めそか中に數百年を経たらんが如き老木を配置する場合もあるし或はかく景色に關係がないにしても古色を

帯びたる幹と枝と蜿々たる龍の臥したらんが如き根とが價値のあるのである。然らば成る可く僅少の年數の間に多年を経過したらんが如く育てるには如何にす可きやと云ふにこは

絶えず適宜の分量に肥料を施すと同時に他方に於てそが枝を撓め蕊を止め水分を成る可く少しく與へるやうにする

にあるので尙ほ適宜日光に當てることは忘れてはならぬ。此適宜の分量に肥料を施すと云ふのが問題で先づ

智利硝石四分 過磷酸石灰三分 カイニット三分

の配合肥料ならば之れが十匁を約三升の水に溶解するが如き割合にて造つた溶液を左の時期に左の割合に施すのを良しとする。

三月ヨリ六月迄ハ一週間ニ一回

六月ヨリ八月迄ハ三日間ニ一回

九月ヨリ十一月迄ハ五日間ニ一回 十一月ヨリ三月迄ハ三週間ニ一回
右は大体の標準を示したものであるが肥料の種類と松の年齢などに由つて多少

異にせなければならぬのは勿論である。
次に一回に施す水溶液の分量のことであるがそれは時期に依つて多少の差異があるが普通一回にその土が充分に湿り得るやうに施すので乃ち鉢全体の土に充分に行き渡るやうに施すのである。

その施す方法は如露にてそおうつと注ぎかけるがよろしく成る可く葉や幹に掛らぬやうにしなければならぬ。

右は盆栽に施す場合の方法であるが庭園に植えられたる松に肥料を施すにはその周囲に溝を掘りて燐炭に養液を吸収させた燐炭肥料として施すがよい。
乃ちその方法は大体果樹に施す場合と同じくかくして施し置けば春季でも夏

季でも直ちに葉の色澤を増すばかりでなくその生育の状況が旺盛になるのである。

要するに盆栽に以上述べたるが如くに肥料を施して怠らなければその仕立方さへ當を得れば僅か数年にして年數を経たらんが如き逸品を得ることが出来る、實に以上述べたるが如き配合の肥料は主として幹を大きくすると同時にその皮を厚く粗にし根を張らし一見古色蒼然たるの觀を呈せしむるの作用がある。

尚ほ又かく肥料を施すと同時に常に成る可く室外に出して日光に觸れさすことと水分をば成る可く少量に施すことをも忘れてはならぬ、之れ養分と日光と水分の三者を充分に與へた時には植物はむやみと丈けも大きさも同時に生育が盛んになつて如何に枝を撓めても蕊を止めても中々にその旺盛なる生育力を抑へることが出来ずに従つて盆栽たるの目的を達することが出来ないからである。

此故に一方養分を充分に施すと同時に充分に日光にも當て他方に於ては水分を制限し水分の關係で適宜にそが生育を抑制して目的を達する方法を取るののである。

以上述べ來つたところに由ると盆栽培養には施肥の方法と分量と時期など、相待つて水分を施す分量と時期と方法を研究せねばならぬ、元來松は他の植物より水分を要することが比較的少ないもので従つて成る可く水分は少なきに失する位に施すのを良しとする、さればとて夏季炎熱の候などには少なきに失したために往々枯死すると云ふやうなこともあるからその施す手加減が極めて大切なので云ひ替へれば盆栽培養の秘訣は一つに掛つて水加減にありと云ふてもよい位である、乃ち松の生育を盛んにするのも抑へるのも或は幹を太くするのも皮を硬くするのも一に掛つて水を施す分量に由つてどうにでもなると云ふ

てよいのである、之れ施肥と相待つて大に注意を要する點で盆栽培養家の第一に心掛けねばならぬ事項である

第七話 松の植込み方

茲で植込み方と云ふのは山野に自生せる松或は他の庭園にあるものを自分の欲する庭園又は鉢に植へ込むことを云ふので元來庭園に植へたり又は盆栽に仕立てる松は自分で種を蒔いて發芽生育せしめたものを植込んで樂しむと云ふ場合は極めて稀れで多くの場合には山野に自生してその枝振や風姿の良きものを選んで持ち來たると云ふのであるから従つてその移植の方法や時期や或は植込み後の手入と云ふことに重きを置くの必要があるのである、前にも云ふ通り松の貴ぶところはすらりと生育した風姿でなくしてその幹や枝が幾重にも屈曲して

如何にも多年數を経たらんが如きものを貴ぶのであるから自然多年山野に自生

したもの求めなければならぬのである。現に盆栽にする松などは高き山や或は海岸の風強き場所に自生して多年間寒風

や烈風に吹き惱まされて數十年を経て漸く一尺にさへも充たない位のものを取り

り來るのであつて従つてかゝる松の産する場所は大抵一定しておると云ふても

よい然らば通常何れの場所のものが多く珍重せらるゝやと云ふに外づ

關東附近にては茨城縣鹿島郡「イキス」村又は大田村近在の海岸の松

中國筋にては姫路の松 四國にては讃岐高松附近の松

などが一般に賞用せられておる、かゝる場所は何れも比較的風當りが烈しき許

りでなく土質の關係もあつて松はズン／＼と生育伸長し難いから自然矮少短幹

に育つのである、右の内で茨城縣海岸に生ずる松は男松多く従つてその風姿も

雄壯で主として關東人に賞玩せられ姫路の松は概して紅肌の女松で一部の人々

には非常に賞美せられておる、また高松の松は男松も女松も多く他所にて得難

い風姿を備へておる。右の外本邦の沿岸には到るところにかゝる松の産しない云ふことがなく中に

も遠洲濱松附近などは松の名所である、彼の濱松附近にある三方ヶ原には庭園

植として極めて妙なる松が多くまた盆裡に恰適のものも少くない、之れ濱松附

近は四時風強く春季などは風の吹かぬと云ふ日は極めて珍らしく風は松に取つ

ては苦痛に感ずるが知れないが人間が眺めて賞玩するに足る松を得るには極め

て必要である、之でみると風と松とは密接の關係があつて風あつてこそ風姿面

白き松が得られるのである。

従つて風と松とはどんな關係があるか何故に風が強くと松の生育が良くな
 いか云ひ替へればその生育を害するか云ふことについて少く説明せねばな
 らぬ元來風は微風ならば植物の生育上極めて良好の結果を來たすものでよそ
 よと吹く軟かき風は以て植物の生育を促がすのである、植物の生育するに差
 常り必要なのはその体内に根から吸収した養液とか葉で同化した養分が循環
 するに少しの故障もないのである、人間でも身体の健康を保つ上に何が必要か
 と云へば差當り血液の循環が良好なことである、血液は乃ち身体の養液で
 ある、この養液たる血液が能く身体を循環して居りさへすれば何時も充分に
 健康は保たれ子供ならばその身体はづん／＼と生長するのである。
 それと同じ理で松でも他の植物でもそれが生長するには此養液の体内に於ける循
 環が良好なのが必要であるのだ、乃ち養液の循環さへ良ければその植物は

ずん／＼と生育するのである。
 此故にその反對に或る作用に依つてもしもその養液の循環が妨げられたとし
 たならば植物はその生育が止まるのである、いや生育することが出来ないので
 ある、海岸其他風當りの烈しき場所にある松が數十年を経ても僅か尺にさへ充
 たないと云ふのは全く強風のためにその体内の養液の循環を絶へす妨げられ
 ておるからである、そよ／＼と吹く微風は或は寧ろ樹液の循環を促がして従
 つてそれが生育を助けるのであるが強き風は反對の結果を來たすのである。
 海岸に立つて少く強き風にもまれつゝある松の状態を見るに右に左に前に
 後に吹き倒され吹きにじられて少しの猶豫もあらばこそ人間か或は他の動物が
 かゝる境遇に置かれたならば直ちに死してしまふのである、植物であればこそ
 かく揺られながらも辛うして生きながらえて居るのである。

要するに強き風はかくもその枝や幹を過度に揺り動かして樹液の循環を妨げ
従つて生長を抑へるのである之れ海岸や風當りの強き場所に育てる松が数十年
を経ながらも然かも尺にさへ充たない理由の一つである、また他の理由として
は海岸や山地は一般に地が瘠薄である、乃ち土地に含まれたる養分が極めて
少ない、松のやうな場合に由つては極めて少量の養分に満足し得る植物であれ
ばこそ育つので他の植物であればその生育が極めて困難である、松はその性
として極めて養分の少ない風の強き場所にさへも生育し得るやうな強健なる性
を備へておるのである。
さてかゝる場所から松を掘り採り來らんには只むやみに直ちに掘り來ることは
面白くない、いやそれでは枯死するの患がある此故に松を取り來らんとらば
先づ松の生地^{せいぢ}に到りて掘り採らんと思ふ松を定めて根の周圍を鋏にて掘り廻し

置くのが肝要である、その掘り廻し置く時期は春季取り來らんとするものは前
年の秋鋏を入れ置き秋採らんとするものは春鋏を入れ置くものである。
かく豫め根の周圍を掘り置くのは元來松はその生育の状態に由つて根を四方に
張つておるものであるから直ぐに之れを掘り來ると云ふことはその生理を害す
ることが多く従つて活着し難いからである、何しろ風に揺られ養分乏しき地に
生育するのであるからせめては根を張つて丈夫に土地にくつつき且つまた四方
から養分を採り集めねばならぬのである、かくて態々掘り採り來る際には根を
適宜に切り去るを良しとするので特に太根は切り去らなければ到底持ち來るこ
とが出来ないのである、且つ又植込みをするときには程能きやうに根を切るを
必要とするもので此際に切るには圖に示せるやうに根を鋏にて皮を上方に残す
やうに切るので決して此反對などに切つてはならぬ、之れその切り口から水分

の浸入を阪ぐため此ことは堅く守らないと活着し難い場合が多い。

松の太根を
鋸取る図



切口を下向
にふたる図

第一圖

る、かくせば枯死すると云ふやうなことは決してない、植附けて後下葉に枯を
すのであ

かくて之
れを假植
えの畑へ
植えて二
ヶ年位は
その地に
ならし後
庭園に移
すのであ

出すものは植付く證で二三ヶ月の後になつて葉一面に白枯の徴の顯はるゝもの
は活着しないものである。

尙また移植の際に注意す可きは之れが植へ込み方である、之れは松の大きに由
つて多少異なるの外庭園に植へ込む場合と盆栽にする場合は元より大に異な
るもので先づ庭園に植へ込む場合のことを述べんに松の大小に由り適宜の穴を
掘り其内に

燠炭三分

堆肥三分

畑土四分

を混合したる配合土を入れ尙ほ水を注いで充分に濕氣を與へて其中に植へ込み
そおうつと土を掛けて押へ付け置くので決して堅く押し付けてはならぬ、かく
植付け後はそのまゝになし置きて別に手入をする必要はないがその生育を良か
らしめんとするには智利硝石、硫酸アムモニア、過磷酸石灰其他の肥料を適宜

配合して液肥として施すがよい、その分量などは前に述べた通りにしてよい。尙ほ移植に際して注意すべきことは根を切ると同時にその枝葉をも取り除かねばならぬことである、すべて植物の根はその枝葉と平均を保つべきもので根から吸収した水分は常に枝葉から蒸發して健全な状態を保つもので必ずその均衡を保たなければならぬのである、然るに松を移植せんとする際などには必ず根の損ず可きもので特にその太根などは到底完全に持ち運びの出来兼ねるもので之れを完全に掘り採ることすら困難で従つて寧ろ前に述べた通り切り去ることさへある位であるから従つて之れと平均を得すために枝葉を取り去るのが必要となるのである。

何れの植物でも移植の際に此平均を得すことは必要で松などは他の葉の大きなものに較べると寧ろその必要が少ないのであるがそれでも此ことを等閑に附し去ることは出来ない、やはり根と枝葉は常に平均を得すやうに勉めなければならぬ。

以上は庭園に植へ込む可き比較的大きな松について述べたものであるが、盆栽とす可き尺に充たないやうな松は多少その移植の方法が異なるのである特に鉢に植へ込む際の如きは大にその趣きを異にしなければならぬ。

先づ海岸其他で盆栽となす可き松を見付け出したならば春季か秋季ならば成る可く曇天で日光の當らない日に之れを丁寧に掘り取り直ちに藁か苔の類にて根を土の附着せるまゝで包み之れを假り植への畑に植ゆるのであるその植ゆる方法はやはり適宜の穴を掘り其中に

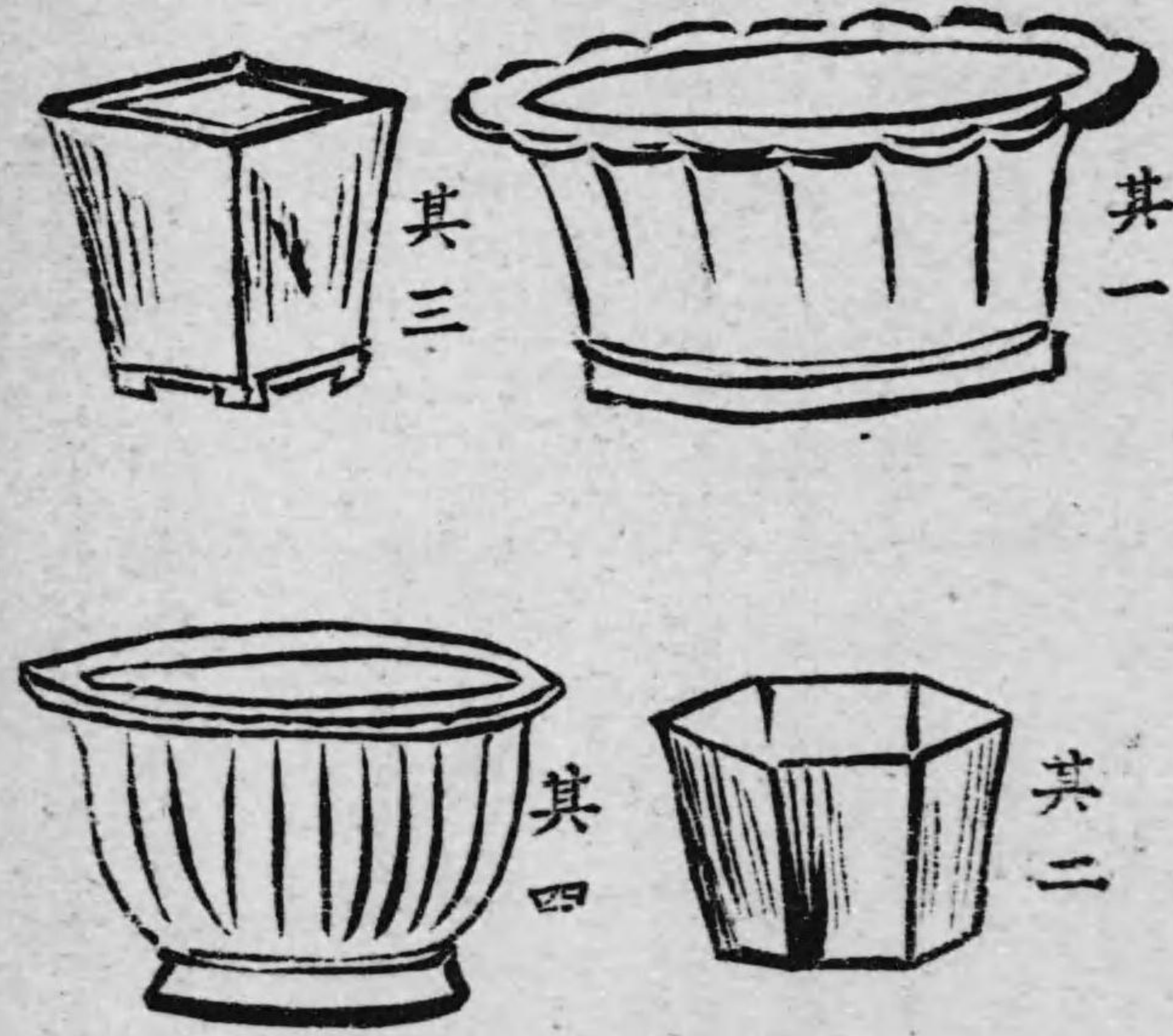
燻炭四分

畑土四分

細砂二分

の割合に混じた配合土を入れ水分を與へて其中に植へ込みなる可く雨水に當ら

圖ノ鉢本



圖二第

るが要するに各
 自の好みは別と
 して松の枝振り
 と仕立て方の工
 合に依つてその
 用ゆる鉢を定め
 るがよい、その
 鉢の形状に由つ
 て松の引立つと
 引立たぬとの差
 が多いから鉢は

ぬやうな設備をして約一ヶ年間位其まゝになし置くのである、かくて程能き頃
 を見計らひて鉢に植へ込むのでこの鉢に植へ込むのに少しく注意を要するので
 ある。

鉢植にするには先づ最初土鉢に植へ然る後に本鉢に移植するのがよろしく土鉢
 に植へる際には鉢の穴の周囲には瀬戸物の細碎片か又は礫を少しく容れ其上に
 薄く砂を敷きその上に

煙炭三分

細砂三分

畑土四分

の配合土を入れて其中に植へ込み少量の液肥を施し置くのである、斯くて一、
 二年の後松が鉢に慣れて最早や之れで大丈夫と思はるゝ時分に本鉢に植へ込む
 のである。

本鉢には浅いのも深いのもあるしその形も種々あつて一定してはいないのであ

餘程注意して見立て、撰ばなければならぬ、盆栽そのものが美術的であるから従つて鉢の美術的で然かも俗に流れず自から氣品のあるものを撰ばなければならぬ。

鉢は頂度松に取つては人間の衣服のやうなものでどんな美人でも衣服が似合はなければ一向に引立たないと同じやうに幾ら枝振や恰好の良い松でも鉢が似合はなければ面白くないではないか。

鉢の種類も中々に多けれども概して陶磁器共に我國の焼物よりも支那焼を好むの風がある、鉢の名稱も種々あれども主なるものを挙げるゝ次のやうである。

白交趾	黄交趾	青交趾	紫泥	朱泥	烏泥
金窯物	海鼠	白高麗	梨子泥	蕎麥泥	古伸萬里
古薩摩	古九谷	翠雀	樂燒		

五 其



六 其



七 其



圖三第

之れを要するに鉢には深きものと浅きものとがあつてその何れが松の生育に宜

しきやと云へば
そは深き鉢では
あるが近頃は多
く浅き鉢を用ゆ
る傾きあり、ま
た浅き方が恰好
も良くその取扱
ひ方さへ當を得
れば左程生育に
影響を及ぼすこ

の割合のものを用ゆるがよい、かくて底の穴の周囲にはやはり瀬戸物の粗な碎

細砂二分

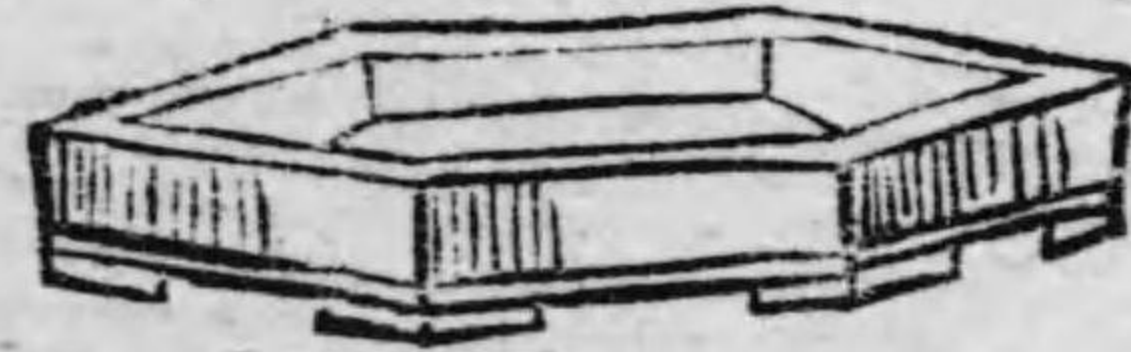
畑土五分



九 其



十 其



第 四 圖

ごもないから浅き鉢を用ゆる方がよい、浅き鉢に植へ込むには深き鉢に植へ込む場合よりも配合土に畑土を幾分か多く用ゆるが宜しく

燐炭三分

片を置き其上に薄く砂を擴げて後右の配合土を施し置くのが良いのである。それから浅き鉢に植へたる場合には深き鉢に植へたる場合よりも水を度々施してその乾燥を防ぐやう注意をしなければならぬ。

松は一旦本鉢に植へ込まれた後は鉢の縁に由つて根が制限されるから根の生長が止まり従つて枝葉の生育は大体に於て停止し肥料の加減に由つてその幹が奇形的に太くなるのである、斯くて一年一年と僅か尺に充たない丈けでありながら數十年を経過したらんが如き風姿を備えるやうになるのである。

第八話 松の仕立方

松を仕立てると云ふのは主としてその枝振りを意の如くに作ることである、乃ちその小枝を曲げ又は繩にて巻いて引き付け置きて永くそのまゝにして自然

松の枝を揉み
換る四半に
その手つき



枝ヲ繩
ニテ巻キ
引付ル
圖



圖五第



圖六第

之ハ
某氏
ノ秘
藏ノ
松ヲ
約十
五年
位ヲ
経テ
品ヲ
アル

こそその風姿になるや、
にするのである、その
方法としては先づ圖に
示せるやうに枝を順に
或は逆に徐々に揉みね
じて柔かに碎きて後其
上を極めて細き棕櫚繩
の如きものにて巻きそ
れを意の如くの枝振に
引き付け仕立てること
圖に示すがやうにする



圖七第

之松茂氏モ
其ノ松茂氏モ
ニテニノ松茂氏モ
經テニノ松茂氏モ
シテニノ松茂氏モ
面振シテニノ松茂氏モ
品キ面振シテニノ松茂氏モ
ルテ逸白リ枝過テニノ松茂氏モ

のである、かくて翌年の仕立た時分迄そのまゝになし置けば自然と其部分に肉が廻つて来て皮肌の出来るものであるからそれから約半年を経たその繩を取り除くがよい。

元の枝を曲げて松を仕立てる時期は春季

樹液の循環旺盛な頃に行ふのがよろしく此枝を揉むのに多少の熟練を要するので極めて徐々に行なはないといけない、此揉む際に枝の組織を害してはならないので組織を傷けぬやうさればとてその部の組織が柔らかになるやうに程よく取扱はねばならぬ、あまり揉み過ぎるとその組織が害されて却つて樹液の循環を妨げその枝が枯死するか或は枯死しないまでも將來の發育が宜しくなく従つて立派な枝振りを得ることが出来なくなる

また棕梠繩の代りに他のものを用ゆることが往々あるけれども色々の點から云ふて此繩に勝つたものがないから必ず之れを用ゆるのがよい。

尚ほ松を仕立てるについて注意すべきことは之れを仕立てんとする際には豫め充分に肥養分を施してその勢ひを旺盛にして置かねばならぬことである枝の色に撓めることは松に取つては甚だ苦痛である、従つて普通の場合には



圖八第

此松ハ東京ノ某氏ノ秘品ニシテ、約十年ノ経テ、品ルテ逸ル

之れがために樹勢が衰へて場合に由つては枯死しないとも限らぬ、此故に豫め養分を充分に與へて樹勢を盛んにして於て後ちに思ふがまゝにその枝振りを仕立てるのが安全である。且又すでに枝振りを仕立て、繩で縛つた

後とても肥養分を施すことは怠らずに充分に與へ、水分をも適宜に供給し且つ充分に日光にも當てねばならぬ、要するにすべて生理上好適な方法を探らねばならぬ、此方法を探りさへすれば松は思いのまゝにその枝振りを曲げて仕立てたどて決して枯死すること云ふやうなことはない、さもなくて單にやたらに枝を曲げ幹を曲げてその後の養分、水分、日光などの關係に注意しないと往々にして枯死するを免かれぬのである。



圖九第

此松ハ懸崖參考品ニテ風姿極メテ珍ナルモノアル



第十圖

此松ハ懸崖參
考品ニ
テ年數
ハ割合
ニ經ザ
レドモ
ソノ枝
振リ極
メテ面
ノキモ
ノデア

を最も貴ぶのであるがもと自然に生育したものを仕立てるのであるからとても望み通りのものが得られる筈がなく要は自然に備はれる枝を成る可く望み通りに仕立てるのが肝要である。
その仕立てる枝振り
は松の自然に備はれる枝に由り各々恰好を定めるのであるが

さて松の枝振りのことであるが一般から云ふと松の骨幹、体軀枝容から論ずるとしたならば先づ。幹太くして倒れず徒らに曲らず枝振片寄らず枝葉共に自から陰陽を備へて何となく締りよきもの



第十圖

此ハ松品會テ賞ニシテノシナ賞ニ得ルモ
此松品會テ賞ニ得ルモシテノシナ賞ニ得ルモ
此松品會テ賞ニ得ルモシテノシナ賞ニ得ルモ

そは何れの一定の方式があるではなく只己れの好むやうにするので別にそれに關しては述べる必要がない、然かし多少商品に仕立てる場合には自から時代の好みに投するやうにする必要のあるのは元よりのことである然らば現



圖二十第

コハ松ノ
約十年位
オ経タ
ル逸品
デ難辨
ノナキ
申分ナ
キ枝振
ノモノ
ト云フ
チヨイ

今は如何なるものが流行せるかと云ふと先づ懸崖物が概して歓迎さるゝ傾がある、然かし以前本書に掲げある風姿のものは何れも逸品の標本を示したもので以て世に誇るに足るやうなものである然かし世の流行と云ふものは妙なるものであるばかりでなく人の嗜好もまた



圖三十第

コハ松ノ
寄親ニテ
中々ニ面
白味アリ
乃ハチ數
本集マリ
ナ一種ノ
風致ナ爲
スモノデ
アル

妙なもので人は尙はその
面の異なるやうに盆栽に
對する嗜好の工合もまた
異なるのであるから幾ら
流行だと云ふたとて必ず
しも一定のものが勢力を
得ると云ふことはない、
要は人々の嗜好と云ふこ
とを根本にして仕立てる
にあるのだ、嗜好と云ふ
ことを離れたならば述べ



圖四十第

所謂
上ノ松
チシ
メモノ
テ中々
ニ趣味
深キモ
ノデハ
チイカ

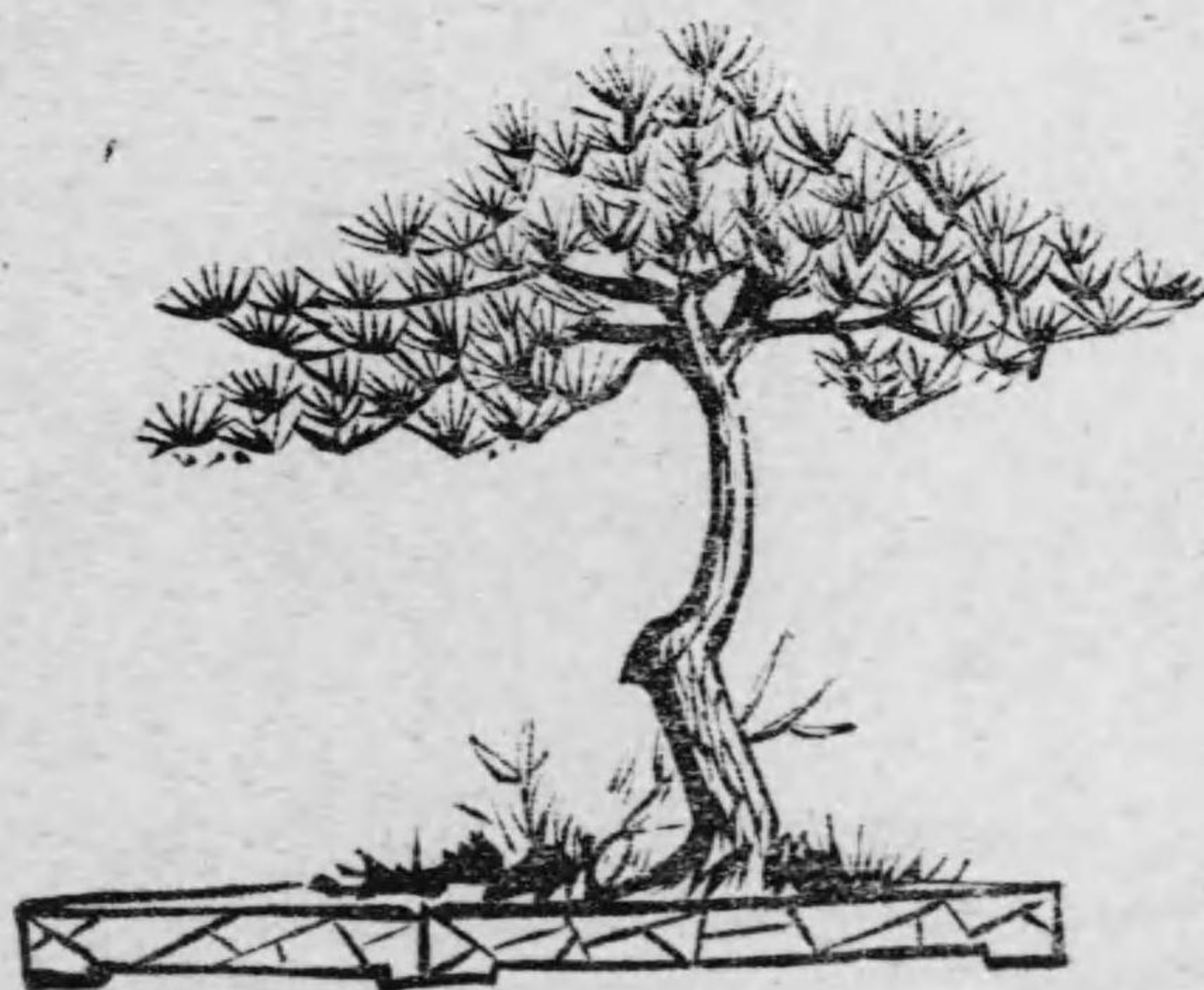
ることは何にもないのであ
る。
然かし序手に少しく盆栽に
ついでの本義を述べんに前
にも述べた通り盆栽は數十
丈になる可き運命を有する
樹木を寸尺の小に縮めると
同時に數里乃至數十里に亘
る可き面積を有する土地を
ばやはり尺に充たない盆裡
に縮め自身が恰かも目前に



圖五十第

コハ松ノ根
上リヲ淺キ
盆ニ根押ヘ
チシタル盆
考圖テアル
年數ハ約廿
五年位ヲ經
タルモノ

かくも廣大な地積を眺めつゝあるかの感を引き起こすのが主意である従つて大なる自然を小なる盆裡に現はすのであるから木は成る可く年経たらんが如き古色を帯びたるのを肯ぶと同時に盆裡の土もまた茫茫たる原野が延々として連なれる如き状を現はすのを良しとする、然かしこは盆栽にす可き樹



圖六十第

コハ比 較的若 キ松ニ テ枝振 リチ面 白ク造 ツタモ ノデア

の状態に由つて必ずしも斯様にすることの出来ない場合があるから一様に云ふことは出来ぬけれどもその主意を述べたものである。要するに室内に居ながらにして人なる自然に接して心身の慰安を計ると云ふのが目的で盆栽を單に閑人の玩弄物視するのは抑も間違つた話である、段々世の中が多忙になり時には劇務に従事しておる人々はやたらに田舎に出掛けて大なる自然に接するわけに行かぬ、せめては之れが縮圖である盆栽に接して心身を慰めると云ふことは極めて有益なことゝ云はねばならぬ、いや盆栽をば成る可く大なる自然の縮圖であるやうに仕立て上げることが勉めねばならぬのである。

數十丈の大木をば寸尺の丈けに縮めたるものでさへどれ丈け吾人に趣味を興へるか云ふことを考へたならば大なる景色を尺に充たない盆裡に縮寫したるもの

が如何に吾人に慰安を興えるかは云はずして明らかではないか、自然の縮寫！
之れ盆栽の主意であつてまた目的であるやうにしなければならぬ。

第九話 松と接木法

普通の場合に接木をするのには主として繁殖を計る場合が多いのであるが然し必ずしもそうではないので一本の植物の枝に數種の珍奇な種類を接ぎてそが眺めを良くするやうなことがあるが松の接木の場合などは乃はちそれで松の盆栽に特に一方の枝に他の種類の松或は時としては枝振の良き松を接ぐ場合がある、だん／＼園藝の術が進み松にしても珍奇な種類が出来或は珍奇な枝振りを欲するやうになるのは明らかなことで此接木術は一般の植物培養上に盛んに應用す可きものであると同時に松にも盛んに應用す可きものであらうと思はれ

る、いや應用しなければ到底珍奇なものを得ることは出来ないのである。
此故に少しく此接木法に關して少しく細かに述べ置く必要があると思ふ、その法を述ぶる前に接木術はどんな變化を一般植物に來たすものであるかを先づ述べんに

- 一、接木術は樹木の結實成實期を速かにするものである。
- 二、接木術は稀有の奇品良種を蕃殖増加せしむるものである
- 三、接木術は老樹の勢力を恢復せしむるものである
- 四、接木術は矮性の樹木をして強盛なる性を遂げしむるものである。
- 五、接木術は強健にして徒長す可き樹木を矮性たらしむるものである。
- 六、接木術は晩種をして早生たらしめ早生を晩生種に變じさすものである。
- 七、接木術は花蕾や結果を變化さすものである。

以上述べたるやうに接木術は種々なる變化を植物に來たすものであつて園藝上之れを巧みに應用したならばその利益たるや實に莫大なるものである、然かし松に接木術を施したとて以上述べたやうな利益の多くを直ちに受くることは出來ない、受くると云ふのではないが只如何に接木術なるものが植物の變性を促がすものであると云ふことゝかゝる變化を松に如何に應用す可きか如何なる方面に應用するのが利益あるかと云ふ理を讀者に知らしめて園藝の進歩を助ける一端にしたいのである。

接木術をして充分なる好成績を擧げんとしたならば其根本である接穂接砧共に何れも健全で強盛なる生育力を有するものを選びなければならぬ、松のやうに主として切接法に由るものは特にさうである、彼の梅の老木に若梢を接いで其風雅なるを稱美して奇品として珍重するが如きは單に愛翫的であつて營利的

若しくは實用的と云ふことは出來ないけれども接木術の巧妙な點から云へば賞す可きものと云はねばならぬ。

尙ほ茲に接木の互に活着する理について少しく述べなければならぬ、元來接木の相接着癒合する所以のものは常に樹幹内の木皮と心材との間にある軟薄なる發生層若しくは「カムビヤム」層と稱する部分の相癒合するに由るものであつて接木をする場合に如何に利刀に依つて巧みに切斷面を平滑ならしむるも此發生層にして相接合することがなかつたならば到底接木の生育は望むことが出來ない。

今もし春季已に樹木が發芽して生育が強盛になつた六七月の頃樹木を切斷した際に皮と肉との相分離するところは乃ほ植物學上の所謂發生層若しくは「カムビヤム」層と稱するものゝ存在するところである、大木でも寸尺に充たない小

木でも此層の存じないものはない。

此故に接木法を行つて能く其効を奏せんとしたならば須らく先づ接木接合の基礎である發生層乃ち通俗に「アマカワ」と稱する部分の位置及び其作用を熟知しなければならぬ、元來此發生層は細胞膜が極めて薄くて細胞が亦小さくて規則正しく配列しておるのが常であつて葉や根から吸収した養分の多くは此層を通つて必要なる体の各部に送らるゝものであるから木質内の他の部に比して頗る貴重なる部分に屬するものと云はなければならぬ。

接木法を行ふに望みては砧木も接穂も共に充分に撰ぶことが必要なるは勿論であつて特に接穂は適當なるものを撰ばなければ到底充分の成績を擧げることが出来ない。

普通の場合には前年に發生した若梢の内の生長力強盛なるもの

を撰ぶのを良しとするので常に園藝家の接穂を撰ぶに樹木の下枝を忌むのは其生長力が幾分か弱くて樹液の循環が遅緩なるがため元來甲樹と乙樹との人工的接合術であるから生長力が薄弱なれば到底その目的を達することが出来ないのである。

特に接木するに當つては生長宜しき若梢とても其先端を接穂に用ゆるときは莖芽共に固結せずして充分なる生長をしないから發芽力が微弱であるばかりでなく皮肉が強固堅實でないから水分の蒸發が著しく従つて生着することが少なきものであるから接穂が少くないからとて主穂の先端をも使用するやうなことをしてはならない。

また接穂は接木法を行ふに當つて切斷するのが宜しとすれどもその接穂を近隣より得ることが出来ずして遠く隔つたる地から運送する場合に於ては切口に接

蠟内くは墨膠などを塗抹したり或は蘿蔔、蕪菁のやうなものに挿し竹筒又は箱内に少しく濕氣を帯べる細土を入れて其内に埋めるか或は土の代りに水苔を以て接穂を包みて箱内に堅く納めたならば遠く數百千里の地に輸送することが出来る。

次に砧木のことであるが砧木の大きさは接木の方法及其目的に由つて一定するものでなく或は野生の老木に接木術を行ひ速かに生長せしめて其果實を改良することがあり或は奇品として愛翫的に老木に接木することがあるけれども最も多く行はるゝは實生の幼樹に接木するのが普通である而して其砧木とす可き幼樹は二年三年生若くは四、五年生等の樹木の生長に由つて一定しないけれども最も多くは周圍一寸五分以上三寸位のものが普通である。

それから接木の季節のことであるがこは春夏及び秋季の三期に區別すべきもので本邦に於ては寒接或は早接及暑接等の方法を行ふことあれども春季發芽の候に行ふのを最も普通とする、また歐米各國では春接及び寒接の二法を行ひ冬季農閑の期に際して接木するけれども我邦では多く春季にのみ行ふて且つ此季節を以て最も癒合生着し易いものとしてある、而して其最も良き季節と稱す可きは

春陽の温暖な氣候に由つて多少樹木が生長を始め樹幹内の樹液が循環して來て皮膚に光澤を帯びて芽が多少膨れ始めて將に萌芽せんとする時

であつて早きに失するにまだ癒合を行はない内に温度の過不及に由つて被害が易く時期を失してすでに發芽した後は軟弱で多漿なる嫩芽の蒸發烈しきために生着が困難となるに至るのである。

此故に空しく好季節を經過せんよりは寧ろ早きに失するを以て癒合の歩合が多

いのである且つまた樹木の種類に由つてその發芽期が異なる許りでなく樹木の發芽期は地方に由つて差のあるのは云ふまでもないことであるが、松について關東地方の氣候を大體の標準として云ふたならば、

三月上旬より四月中旬

迄で位に行へば差支がない、いや最も良い結果を來たすのである。

さて接木法の種類は中々に多く約十一種もあつて各々一得一失はあるが樹木の種類に由つて各々特別に適する法があつて松に最も適する法は割接法と稱へるのであるから此方法について次に述べることにする。

割接法とは砧木を割き之れに接穂を挿し入れるもので一二年生の植物の新梢か又は老木の太枝に接着せしむる場合に多く行はれ松樹のやうな木質が柔軟で脂油を分泌して癒着が容易なる種類に行ふのが常である、松樹の如きは和洋共に

松の割接法



第七十圖

此方法に由つて専ら接木法を行ふので今我邦で普通に松樹の接木する方法を

述べるに

松樹を接木

するには一

年生又は二

年生のもの

を撰み數寸

の長さに剪

斷し其斷面

の中央から

長さ七八分

程縦裂せしめ之れに新梢の生育佳良なる種類を先端から二寸程の長さに切り切斷部の兩側を楔形に削り先端を其まゝとして縦裂部に挿し込み砧木の葉で上部を被ひ藁で緩く縛り移植するもので大なる松樹も此方法に由つて枝端を悉く接木して全く異種の松樹に變せしむることが出来る此故に此法をまた穂先接と稱することがある。かく大なる松樹に巧みに接木して珍奇なものを造るのは甚だ趣味のあることで大に奨勵すべきことである。松を接木するには大抵右に述べた割接法に由るものであるが尙ほ參考のために一般の樹木に應用され廣く行はれておる切接法のことを述べやう。此切接法は接木法中最も普通に行はれ且つ最も施術が容易で而も接着の場合多きもので一寸乃至三寸の周圍を有する砧木より一尺以上二、三尺の周圍を有す

る砧木に至るまで此方法に由つて接枝せしむることが出来るが尙ほ參考のために古今の差なく其方法を最も普通のものとしてあつて接木術なる語は殆んど切接法を意味するやうに世人に思はれておる位である。其法先づ砧木となすべきものを短切す可く砧木小なれば土際から五、六分を殘して切斷し利刀にて削り其面を平滑ならしむ可く大木なれば根元から一、二尺の長さに切斷するの必要がある、而して其切斷すべき面は本邦にては從來幹と直角乃ち土地の表面と平行に切斷し來つたけれども時としては斜面に切斷するものもある、又大木では木心を少しく高くし周圍を少しく低く平滑に切斷するを常とするもので要は切斷面に水分を滯滯せしめないやうにするを目的とするのである。次に接穂は長さ一寸五分乃至三寸であつて一芽乃至二、三芽を有するものを鉄

切つて平準か又は斜面に滑らかに削り其下部の側面を長さ八分乃至一寸内外に削り其正反對の部分の長さを二分、三分程深く木心に向ふて斜に切斷す可く要は砧木や接穂の發生層をして接着せしむる點を多からしむるのであるから時と場合に由つて深く削ることもまた浅く削ることもあるが要するに寧ろ深くして長く削り其正反對の部分をして短斜にして深く切斷する方がよい。

また接穂の剪梢は一瞬時に於ける一刀の下に切削す可きもので要は切削面をして高低彎曲せしめないやうにすることを欲するに外ならないのである。

斯くて接穂を得たならば砧木の平滑にして傷なき部分を撰み木質部と皮部との間隙乃ち軟薄なる發生層の存在する部分を接穂の削切面と同長に切り下げ尚ほ白肉乃ち木質部を極めて薄く削除し以て砧木及び接穂の木質部を相密着せしめ其兩側にある接穂と砧木の發生層を相附着せしむ可く砧木の剪梢を行ふ間

は接穂を口中に保持するを以て最も便利とするのである、之れ手術の間に種穂の切削面の水分の蒸發を豫防するためである。

かくした後は砧木の皮部であつて一部は開放したもので接穂を被ひ下部から打蕪のやうなものを以て巻繞し上端に至つて結縛し置くのである、此結縛するのに緊くすると緩くするとは樹の種類に由つて大に關係のあるもので松にあつては一般に緩く縛するのを良とするのである。而して縛するには蕪を用ゆるのが最も宜しく松は一般に活着の極めて容易なものである。

第十話 松の實蒔法

松は盆栽にしたり庭園に植へたりする場合には前に述べたやうに通常山野に自生したものとか或は海岸に自生したものを掘り取り來るのか通常ではあるが、

時としては實生から養生する場合もある、元來海岸や山野に自生したものは自然にその枝振りが千變萬化しておる代りに或は己れの欲する枝振りのものが得難いことがある、然るに種實を播いてその芽生えの時分から徐々にその枝振りを作るやうな方法を取れば自己の欲する形のもものが得らるゝから此法に依ることが多い乃ほち松の實時にする場合を擧げてみやうならば

一、植林をなす場合

一、自己の思ふがまゝの枝振りのものを得んとする場合

一、實生の盆栽の松林を得んとする場合

などで従つて播種の場合は場合に由つては極めて必要なものであるから今少し如何にして實時を行ふやを述べやう、
松の苗を得んがために實時を行ふには先づ床を設けねばならぬ、その床を造る

には成る可く日當りの良き場所を選びて土を細かに碎きて後

燻炭と能く腐熟せる推肥を等分に混じたる燻炭肥料を一面に厚さ一寸位に撒

布してその細土と能く混じ

その上に種子を蒔き尙ほ種子の上に薄く燻炭を振り蒔き適宜水分を施し置く
能く發芽生育するのである。

元來松の種子を蒔いてそが生育を計るのはその目的に由つて多少趣きを異にするのではあるが多くの場合に於てはそが生長の速かならんことを計るのは一つである。乃ほち十年で育つところは五年で育つところは三年で三年で育つところは一年に育て上げるやうにするの必要なることは何れの場合でも同じである。

以上述べたやうな方法で燻炭肥料を用ゆるのは全く發芽生育を促さんがため

此煤炭を用ゆるこそその生育が驚く程盛んになるのである、然かし單に煤炭肥料を用ひた丈けではその生育をやたらに促進するわけには行かぬその生育を速かにするには種子を極めて疎に蒔いてそれから之れを移植する際にも充分に疎に植へ込まなければならぬ。

疎に蒔き或は疎に植へ込んでそして煤炭肥料を充分に施さへすればその生育は非常に速かで従來五年で生長する丈けを僅か一年位で生長すると云ふ位のものである、此故にかゝる方法に由つて實蒔きにした場合にはその生長が速かであるからそれにつれて自己の思ふがまゝの仕立方をすれば極めて短日月の間に立派に仕立て上げることが出来る。

特に實生から生長した松を庭園に植へ込まする場合などは自然に生育したもののよりも一種の趣があつて中々に捨て難いところがある、ましてや早くから

自己の意のまゝにその枝振りを作つた場合などには自然の松の企て及ぶこと出来ぬ枝振りを有することになる、従來のやうにまた煤炭肥料の發明と疎に植へることが植物の生育を助けると云ふ眞理の發見されなない時分には松の實生はその生育が極めて遅々たるものであつたから之れを仕立て上げるには多くの年數がかゝつて従つてかゝる方法を取る場合は極めて少なかつたが近來のやうにその發育が極めて促進される方法がある以上は實生を培養して之れを仕立て上げる方法を探るがよいではないか。

元來から云ふても煤炭肥料を用ひない場合とても實生で育て上げたものは自然に風雪に揉まれたものよりはその生育が非常に早い、いやその生育が良い、従つてその勢が旺盛であるから思ふ存分にその幹や枝を撓めて仕立て、も枯死するやうな場合が少くない之れ實生木の自然生に優れる點である。

此故に特に屈曲したとは或は自然生の木に自然に備はれる趣味を別としたならば庭木にするものでも成る可く實生のものを用ゆるがよい。

また本書は山に植え付ける松のことを述べるのが主意ではないが次手に少しく松の植林のことを述べんに従來松を山や原野に植え付けることは他の樹木に於けるやうに盛んでなかつた、乃は杉などを植林することは従來極めて盛んなものである、然かし松は他の樹木の生育しない瘠薄な土地にさへも能く生育するからかゝる地に植え付ける場合がだん／＼多くなつて來た、かゝる場合にはその苗を要することも多く且つかゝる苗は成る可く強健に仕立てる必要があるから庭木や盆栽の苗を仕立てるとは多少趣きが異なるから之れについて少しく述べねばならぬ、先づやはり適宜の場所に苗床場を設けるのでその苗床場は通常巾三尺長さ適宜にし地面を約五寸程の深さに堀りその中に左の配合土を入れる

のである。

煖炭と能く腐熟せる堆肥と等分に混じたる煖炭肥料五分に細かく碎いたる畑土三分と細砂二分

とを能く混じたるものをその中に入れ込むのであるが之れはふわりとでなく成る可く適宜に足で押し付けて堅く入れ込みて他の地面と平等にし尙ほその上に厚さ二寸位に同じ配合土を緩やかに置きそれに種子を一粒づつを一寸の距離に正條蒔きにしてその上に薄く煖炭を振り掛け尙その上に少しく藁の類にて日光の直射を防ぎ置くとその發芽生育することは極めて盛んである。

かくすれば一時に多數の良苗を得ることが出來て植林などする場合に苗を仕立てるには是非共右の方法を採らねばならぬ

さて松の種實は如何にして採集し如何に取扱う可きやと云ふに通常の場合には

秋の末に實を殻より採りて適宜に日に干して後ち温度や濕氣の變化の少なき場所
所に埋め込み置きて春の彼岸頃になつて前に述べたやうな苗床を作つてそれに
蒔き立てるので松は他の植物の種子に比較すると芽立のよきもので多數は發芽
生育するものである。

元來植物の種子の發芽生育するにはすべて空氣と温度と濕氣とを要するもの
で生活力のある種子なれば必ず之の三者が揃つて居りさへすれば發芽しない
と云ふことはないもので前に述べたやうな苗床特に燻炭は種子に温度と濕氣を
與へるのに無上の作用を有しておるので従つて種子の發芽生育を促がすことが
非常なものであるのだ、此燻炭の發り以來之れを使用しさへすれば他の如何な
る方法に由るも發芽困難な種子でも容易に發芽生育せしむることが出来るやう
になつた、實に燻炭は植物の苗を仕立てる上に一大革命を來たすべきものと云

はねばならぬ。
次に松の實生林の
盆栽のことについ
て少しく述べなけ
ればならぬ、此實
生林の盆栽は中々
に興味多きもので
或る一部の人人に
由つては非常に賞
玩されておる之れ
は單に盆や鉢に植



圖八十第

岩上の
實生松
を示す
中々に
妙では
ないが
へたものに限ぎ
るのでなく或は
珍奇な岩石を水
盤に載せたもの
ゝ上に生育さし
た場合も多くて
乃ち大きな岩
石の上に蟠まれ
る所謂岩上の
松なるものゝ景

色を寸尺に充たない盆裡に
現はすものでその趣味の深
きことはまた一段である。
さて如何にして實生松の盆
栽を作るやと云ふに先づ成
る可く淺き廣き盆を撰び底
の穴の周圍にはやはり瀬戸
物の破片を置きその上に砂
を薄く敷きその砂の上に
燠炭四分 細土四分
細砂二分



圖九十第

松の實生
を示すも
ので蒔き
付けの秋
季の跋を
示めす然
かし燠炭
を用ひな
ければか
く生長早
くなし

の配合土を入れ其上に
直ちに蒔き付けるので
豫め燠炭に
硝石四分 過燐酸
石灰三分 木灰三
分の
の配合肥料の十匁を約
四升の水に溶解したる
如き極めて稀薄な溶液
を吸収さして置くこと極
めて良好の結果を來た

すのである。
尙ほ實生松を仕立てる
場合には極めて灌水に
注意することが肝要で
あまり乾燥に失せずさ
ればとて水分が過ぎて
も元より不結果を來た
すのであるからその加
減が大切である。
また岩上に實生松を
植へ付けるにはその岩



圖十二第

永盤中の
自然石に
實生松の
發生せる
を示す

石の形状を撰ぶ可
きは勿論のこと
あるがその質をも
充分に撰ばなけれ
ばならぬ乃はち自
然石であつてその
中心に抜け穴があ
るものとか或は水
成岩質のもので水
を能く吸ひ上げる

性のあるものでなければならぬと云ふやうなことがある。
松の實生林を作るに最も容易なのは深き鉢に種實を蒔き付けた場合で元來松



圖一廿第

鉢に於ける松の實生林
は根の深きものであるから従つて浅き鉢に於けるよりも深き鉢に於ける場合の方がその生育が良好である。
それから尙ほ茲に注意すべきことは何れの場合に於ても實生林を作つた場合にその松があまりすん／＼生育することを好まない時には極めて密に種子を蒔くのである、これは松の苗を苗床で仕立てる場合と

は全く反對であつて苗床に蒔く場合には強健なる苗を仕立てるのが目的であるが實生林を作る場合には必ずしもそうでなく寧ろその生長を或る程度に抑制するのであるから密に蒔くのである。

すべて植物の種子は密に蒔けばその生育を制限せられて生育悪しく之れに反して疎に蒔けばその生育が良いと云ふのが一般の状況である此故に實生林を作る場合には成る可く密に蒔くが良いのである。

第十一話 松の手入法

すべて盆栽はその植へ付け方よりも仕立方よりも手入法が一番大切である如何に枝振りの良い松でも所謂たちの良い盆栽でも日常の手入法が良くなかつたらばだん／＼悪變するのを免かれぬ而してその手入法とは元より時期に由つて

大に異なるので春の手入れと夏の手入れと秋の手入れと冬の手入れと各々異なるのであるが要するに松でみれば成る可く手入れに由つて松の價値を多からしむるやうに立派に仕上げるのが目的であると同時に松をして枯死せしめないやう、勢を強からしむるやうにするのである。

さて如何にせばかゝる目的を達するかと云ふに手入れとは云ひかへれば乃ち培養のことであるから左のことがらを行ふのを云ふのである。

- 一、枝葉の餘分のものを取り除き絶へずその工合を直すこと、
- 二、屋外と室内との出し入れを加減すること、
- 三、肥料の施し方に注意すること、
- 四、水分の施し方に注意すること、
- 五、温度の變化に應じて適當なる方法を取ることを、

右に述べたることからは何れも植物生理上有益なることであつて之れ等を行ふのは頂度吾々人間が日々衛生上することに重きを置いて之れに注意すると同じことで幾ら健康なる



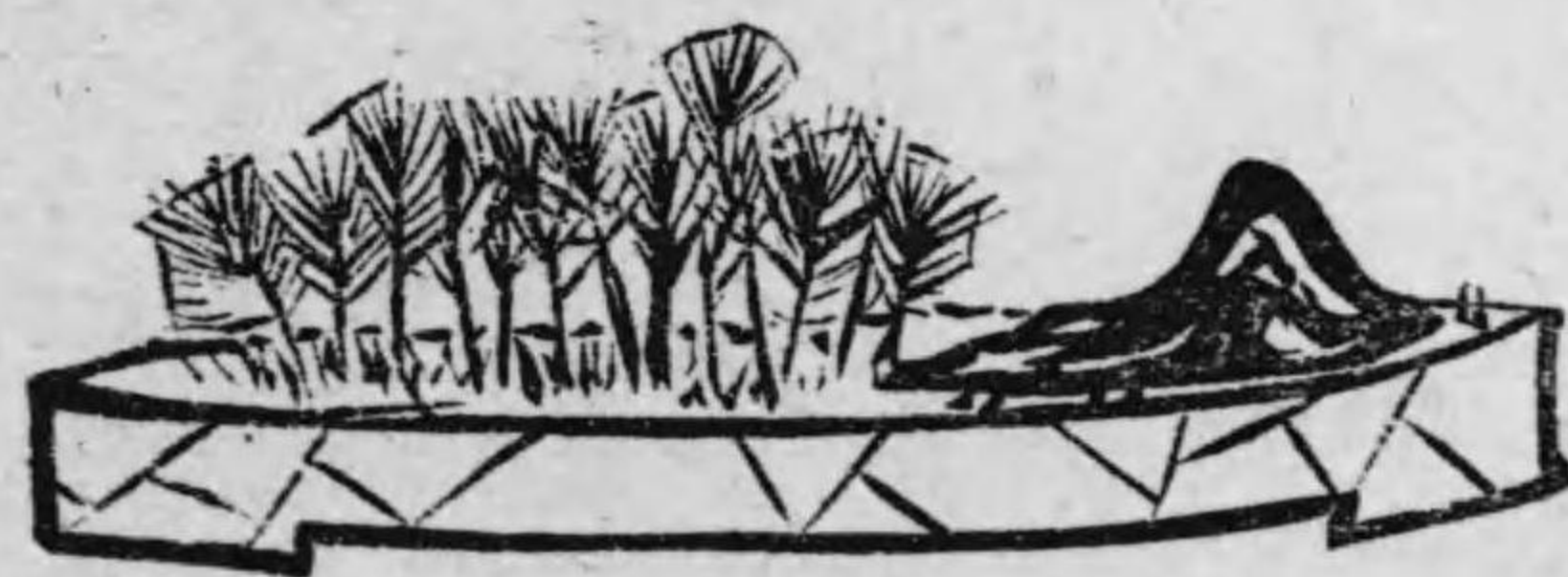
圖二廿第

身經たる
と云ふに
はあらぬ
と其風姿
に面白き
所あり

などは益々その生理上することに注意して日常充分の手當法乃ち手入れ法を

じことで幾ら健康なる
身体でも衛生上のこと
に日々注意していない
と終には病氣に罹ると
があるのである、況ん
や元來が病的である自
然の性状を離れて薄弱
になつておる松の盆栽

行はないと立派な盆栽は悪變し或は場合に由つては枯死を免かれないのである。
要するに盆栽は丹精を凝らさなければならぬのである。丹精とは乃ち手入法のことである。數年或は數十年間も丹精してこそ始めて世にも得難い逸品を得ることが出来るのである。實は盆栽の妙味は丹精を凝らす間にあるのである。頂度慰安に狩獵を爲す場合のやうに鳥や獸類を得て之れを食するのが甘いのではないや、面白いのではない。將た又目的ではない。



圖三廿第

岩に松
の實を
林

狩獵を爲すのが面白いのである。必ずしも鳥や獸類を得るのが面白いのではない、狩獵そのものが面白いのである。
また人の釣をせんと欲して糸を河海に垂れるのも魚類を取るの目的には違くないが必ずしもそれを食するのが唯一の目的ではない。釣そのものが面白いのである、魚を食するのが目的ではなくて魚を捕へる際に自から生ずる愉快を味はんがためである場合が多い。
盆栽を慰むのも頂度之れ等に似て居る點がある。必ずしも松の盆栽を仕立て上げて眺むるのみが樂みなのではない、之れを丹精して作り上げるのが面白いのである、いや丹精そのものが妙味があるのである、丹精そのものに妙味を持たぬやうな人にはとても立派な盆栽は作り上げることは出来ぬのである。
要するに盆栽は丹精である。丹精して手入をして作り上げるのである、さてその

丹精をするにしても間違つた生理に反した方法を行つてはならぬ、適當な生理になつた方法を採らなければ盆栽は決して立派なもの出来ぬ、つまりその丹精の仕方を茲に述べるのである、丹精の仕方さへ適當で理になつたことであれば五年で出来上るものは三年で十年かゝるものは六年で出来上るのである、或は尙ほまつと早く出来上るのである、生理になつた丹精！之れ將さに讀者に勸めんとしつゝあるところのものである。

先づ第一の枝葉の餘分のものを取り除き絶へすその丁合を直すと云ふことについて述べんに元來松はその葉が四時いつも青々として一向に變化がなやうであるがその實決して葉が變らないのではない、絶へす新らしき葉が出来て古い葉は落ちて常に葉が變つて往きつゝあるのである、然かし他の多くの植物のやうに葉の變化が劇しくないのであつて従つて吾人の目に觸れる場合が少なく人々

は常に何時も葉は變らぬものであるやうに思ふのである、然かし葉は絶へす新



第廿四圖

根上り
松ノ逸
品ノ例
ヲ示ス

沈退謝しつゝあるのであるが之れを自然に任さずに入爲に古き葉は成る可く取り去り新らしき葉を着けさすやうにするのが見かけもよしま

木の爲めにもなるのである、その新らしき葉と古き葉との區別やその取り去る

程度は松の木の大
小、年齢、乃至枝
振りの工合に由つ
て定む可きもので
その木を本位とし
て行ふものである
から一々述べるわ
けに行かないが所
謂丹精をする精神
があれば自から明
らかにるのであ



丸ク枝振ヲ作りシ松ノ一
例トシテ

圖五廿第

る。
單に葉ばかりでなく枝の
工合にも絶へず注意して
曲ぐ可きものは曲げやう
し取り去るものは除くと
云ふやうな方法を採らな
ければならない、云ふま
でもなく樹は生きたもの
であるから一旦立派に仕
立てた枝振りも之れを放
任して置くとは何時とはな

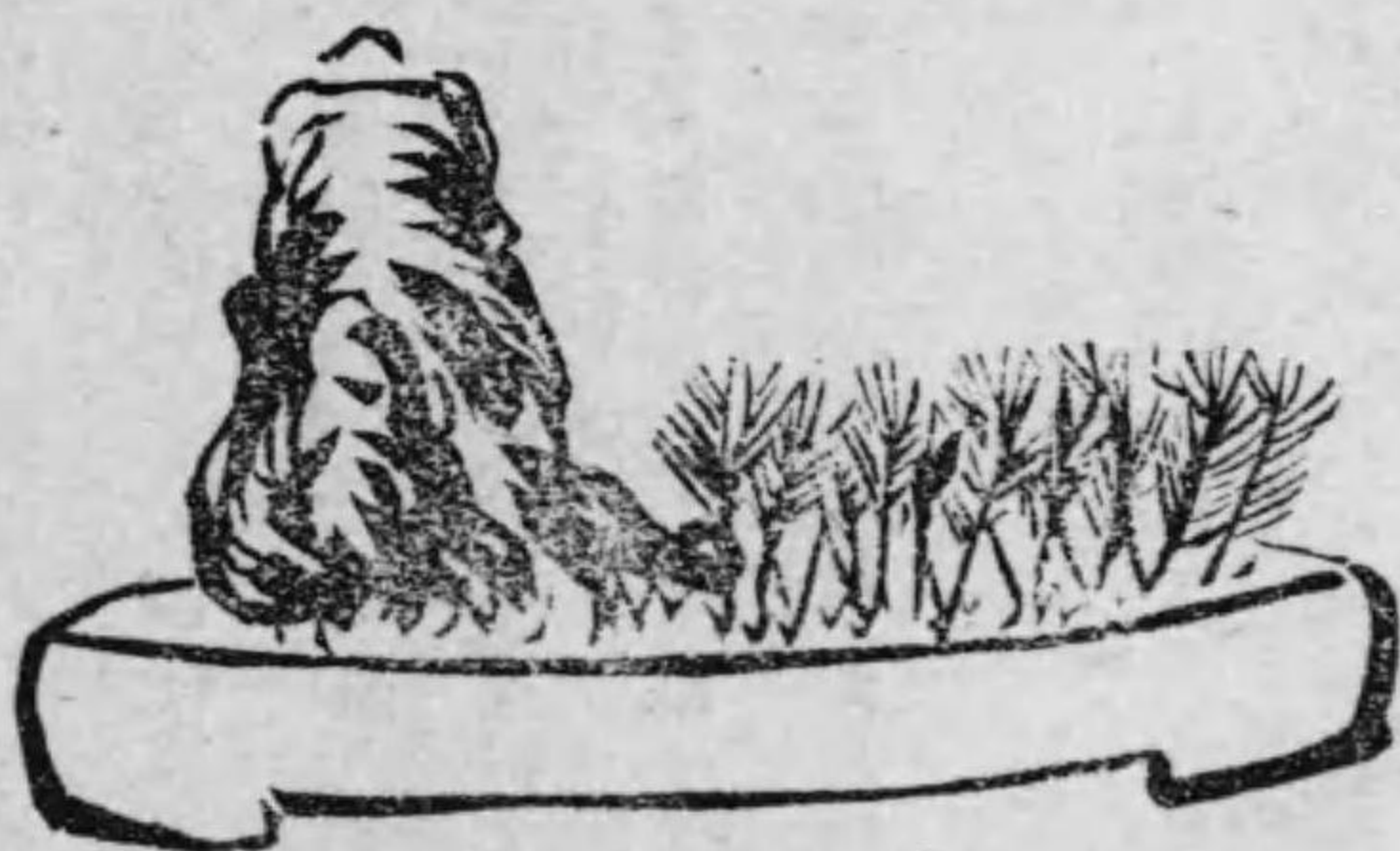
しに惡變する場合が多い。

かく注意する必要の多いのは春季から夏季にかけての間であつて此時分は樹の
生育が盛んであるから此際に充分に手入れして立派なものに仕立てねばならな
い、もし此際に樹を放任して置けばそれこそ容易に惡變するのである、春季發
生する新芽などは適宜に除く可きは摘み去り残す可きは其まゝにするなど能く
その撰擇をしなければならぬ、かゝる新芽の取捨撰擇などは手法中の最も
大切な事項である、之れが巧拙は直ちに盆栽の善惡に影響を及ぼすのである
から充分に熟練と注意を要するのである。

第二の屋外と室内との出し入れを加減することもまた極めて大切でやはり之れ
を等閑に附しては終に盆栽の枯死を免かれぬのである、元來前に生理の所で述
べたやうに植物はすべて光線を要して日光に觸れずに生育するものでない、或

る期間の間は日光の當らない室内で能く生活力を維持するではあらうが何時までも日光なしには健全に生育しておることは出来ないから能く見計らいて日光に適宜に觸れさすやうにしなければならぬ。

單に日光ばかりの關係でなく屋外と室内とでは空氣の工合水分の關係或は温度の關係乃至は水分蒸發の關係などみな異なるのであつてそれに應じてその生理に影響を及ぼすものであると云ふことを充分に心得ねばならぬ、普通の状態にある健全の樹木ならば元よりかゝることに



圖六廿第

然生質の松に岩

注意する必要は少ないであらうが病的の状態にある松の盆栽では此ことに充分



圖七廿第

に注意せねばならぬ頂度吾々人間の病人は藥を飲むよりも多くの場合に手當てがる逸品必要であるやうに盆栽には其枝振種々の手入れが必要であるの如何春季温暖に向ふ季節には成る可く庭に出して日光に當てるやうにしなければならぬ元より雨天のときには出してはならぬ天氣のときに

之れは有名なる逸品である其枝振の如何に妙なるかを知らる

限ぎるのである、然かしだん／＼夏季に向ふて気温高まり日光の力強くなるにつれては成る可く室内に入れ置き時々日光に當てるやうにし夏季炎熱の候には勿論屋外に出さぬやうにしないでならぬ。

之れを要するに屋外に多く出す必要のある季節は春季と秋季とであつて夏季炎熱の候と冬季嚴寒の候とは成る可く室内に入れ置くやうにするのである、その何日目何週間毎に出し入れすると云ふことは氣候の工合や天氣の工合に關係して豫め一定して話すわけに行かぬが要は四季を通じて少くも一週間毎位には必ず一回は日光に當てねばならぬ、多く盆栽の枯死するのは水分其他の關係もあるが主として日光の關係に由る場合も少くない、植物は動物よりも多分に日光を要するのである、動物は随分日光に觸れずとも永い間生活力を維持することも出来るが植物は日光に由つて養分を消化して生活力を保つのである。

ら日光なしで永く枯死せずに居るわけに行かぬ、素人の盆栽を枯死させることのあるは主としてこの日光に當てることの不足から起る場合が多いから元來盆栽は室内に置く場合が多いこともまた成る可く日光に當てることには注意しなければならぬ、日光なしには到底植物は生育することは出来ぬのである。

また冬季嚴寒の候とても寒氣が厳しいからとて室内にばかり入れて置くわけには行かぬ暖かき天氣の日を見計らひて南向きの日當り良き場所に出して日光に當てるのがよろしい、冬季室内は温度は高いけれども日光は直射せぬ、日光なしには植物は決して生育せぬと云ふことを充分に心掛けねばならぬのだ。

最も良き方法は冬季盆栽を温室に入れ置くことである、讀者諸君の知らるゝやうに現今流行の温室乃ち所謂「グリーンハウス」なるものは温度も高く日光も直射して冬季草木の手當をするには最も好適の場所である、盆栽を培養したり

草花の栽培に志ある人は是非共温室の利用と云ふことを心掛けねばならぬ。かく植物に光線が必要であるからとてあまり日光に當て過ぎてはまた莖葉が伸び過ぎて盆栽の風姿を損ずると云ふことがあるから之れ等の細かな點については大体右に述べたるところを玩味して臨機應變の方法を採りさへすれば段々熟練してその手入方が自然に合點が行くやうになるのである。

第三の肥料の施し方に注意することもやはり手入法の一つで常に時期と松の狀態に由りて施肥の手加減をするのであるが大体は前の肥料の話のところに述べたあるからそれに依つて施しさへすれば宜しいのであるが尙茲に申述べ可きことは肥料を施す場合には成る可く次に述べる水分の施し方と相待つて施す可きもので一般に云ふと盆栽に施す肥料は極めて薄き液肥を施すのを良しとするのであつたら液肥も施し水分も別に施しては一体に水分が多きに過ぎるからその

點に注意しさへすれば他は前の肥料のところに述べたことに依つてよろしいのである。

第四の水分の施し方に注意することであるが、之れが中々に大切である、盆栽の枯死は光線に當てることの不足から來たる場合も多いが水分の關係から來ることも少なくない、一般に水分を施し過ぎる場合が多いか不足の場合が多いかと云ふと兎角素人は水分を多く施し過ぎることから却つて根を害すると云ふ場合が多いやうである。

水分が不足のために植物の枯死すると云ふ場合は極めて稀れであるが多きに過ぎたために枯死する場合は少ない、元より水分の不足の害のあるのは云ふまでもないことであるが水分が多きに過ぎると根の呼吸作用を妨げるばかりでなく根から自身に有害なる有機酸を分泌するの作用をも妨げて之れがために根を

害することが多く従つて根の生活機能を妨げて終には植物の枯死を來たすやうになるのである。

さて水分を施すに注意を要する時期は元より春から夏にかけて、あつて乃はち植物の生活機能が旺盛な時期である、此季節には他の秋冬の候に於けるよりも多量に充分に施す必要があるので此季節には水分の蒸発作用が一般に盛んであるから従つて之れに費やす水分を補う意味で多く施すことが必要なのである。元來普通の井水には何れも礦物質が溶解し従つて植物の養分たる可き成分を含まれておるのであるから他の肥養分の少量を加味して極めて薄き肥料として施すと云ふことは甚だ當を得たことである。

また幾ら春夏の候とても雨天の續く際などには元より室内に入れてあることであればあまり多く水分を施さないやうにしなければならぬ、水分を多く施し過

ぎて根を害するのは主として此季節に多いのである、乃はち雨天の際には日光に當てぬばかりでなく空氣中にも濕分が充ちておることであるから根から吸収する水分は極めて少ないのである、かゝる際に水分を施し過ぎることの害の多いことは見易きの理ではあるまいか。

それから尙ほ水分のことについて述べ可きことは冬季嚴寒の候に施す水分は幾分か微温湯にして施すのを良しとする。

また、すべて盆栽に水分を施すには必ず如露を用ひねばならぬことである。第五に必要なは温度の變化に應じて適當なる方法を取ることである。こは主として冬季間の保護を意味すること、松を盆栽として室内に入れ置く場合には別に保護を興へる必要はないやうなもの、必要に應じて屋外に出し置く場合とか或は庭に植へてある場合などには葉にて相當に寒氣を防ぐ方法を探らねばな

らの松はその性としては寒氣に強いものではあるが然かしそは自然の状態に野生である場合に限りて人工で多少保護されるやうになるとやはりその性状が弱くなつて従つて保護を加ふるの必要が出来て来るのだ。
以上は主として松の盆栽についての手入れ法であるが、庭木の松もやはり春季には古葉を取り去るとか新芽を適宜摘み去るとかの手入れ法を行ふ可きは云ふまでもないことで庭木の手入は主として植木屋のする仕事で従つて別に述ぶる程の必要はないのである。

第十二話 根上り松の仕立方

根上り松とは乃ち根の多く地上に露出した松を云ふので中々に趣味深きもので一部の人々に極めて貴ばれる場合がある、いや極めて賞玩せらるゝのである。

元來植物の根は二様の作用を有するので養分を吸収してその体を養ふの外植物体をしつかりと土地に附着せしめて之れを地上に支へる作用を爲すのである、而して養分を吸ふ作用は細かき根の先端にある細かき根毛と稱する部分であるのでつまり根の極めて細き先端から養分を吸うのである、従つて太き根は一向養分吸収には關係がないので、その一部若くは大部が地上に露出しておつたとて松自身に取つては一向に差支へがないのである乃ち幹の一部分と見て宜ろしきもので従つて或る方法に由りて之れを地上に露出さしてそが奇形を賞するものは植物に取つては害がないのである。

然かし植物の種類に由つては根部の地上に露出するを忌むものもあるが松はその性状として寧ろ露出するを好む傾がある位である、彼の自然に山野の岩上に自生せる松だとか或は海岸の鬱蒼たる松の根が恰も龍の蟠まれるが如く大蛇の

延々たるが如き状を呈して長く蔓延するのは之れ自然の必要に迫られたる者でかくして松は常に吹き付ける烈風に反抗するが爲であるのと尙ほ他の理由としては地中岩石が多くして深く下に侵入することが困難であるがために地面に接して根を四方に放ちて養分を採るの作用をなすがためである。その證據には地下の柔かき場所の松は決して地上に根を露出するやうなことはないが岩石上僅かの土壤のあるところに生育せる松だとか或は石礫多き海岸や山地に生育せる松に限つて根を露出しておるのである。かくの如く植物は境遇に由つて色々に變化するもので従つて此性状を利用すれば目的を達することが出来るので庭木の根上り松を得んとする場合には海岸其他山地に自生せる根の多く露出した松を取り來りてその一端を棕梠繩で縛して自己の思ふまゝにその枝に吊し上げ置くと自然と頂度枝を仕立てた場合のやう

に根の大部分が地上に露出して來るのである。然かしかゝる方法を取ると共に尙ほ必要なることは之れを植え込む場所は豫め土を掘つて細かき軟かな土を除きて其中に石礫の大なるものを入れ込み其上に細かに砂を薄く蒔きその上に畑土と燐炭とを等分にしたものを木の大小に應じて成る可く淺く盛つてそれに植え込むのである。其石礫を敷き込むのは成る可く廣き面積にして松の根の容易に伸長しても近傍の軟かき土のところに達することの出來ぬ位の程度にするのが必要である、その廣さや深さは木の大小と土質の關係に由つて一定することは出來ないが要するに根が養分を吸収するに差支へのない限りは他の方面に向はずに地上に露出さすやうに仕向けるのであるからその考へで廣さや深さを定むれば間違がないのである。

要は松の生育に差支へのない限りは成る可く土を浅く少くすると云ふのが目的であるかくすれば根は下に向はずにいやでも地表面に現はれるやうになるのである自然と根の向ふ方向を地上に向けると同時に一方根を繩にて上の枝に引き付けるやうな方法を取れば思ふがまゝの根上り物を得ることが出来る。かくてすでに目的を達して自分の望み通りのものを得たならば今度は徐々に細土を根の方にやる方法を採らねばならぬ。右は大きな松にも小なるものにも何れにも應用する可き方法で盆栽にも此方法を應用することが出来るのである、乃ち盆栽にする前に豫め右に述べたやうな方法で庭に植え置き充分に根を上げて後適當の時期を見計らうて盆栽植にするのである。

此際に於ける盆は成る可く浅きものを用ひその底には比較的粗な礫を敷き普通

の場合よりも土を浅く入れるやうにして其上に植え込むのである。

岩石上に自生せる松の根が如何に多く地上に露出して居るか云ふことを考へ且つまた海岸の砂礫中に自生せる松が同じ状態にあることを考へて成る可く此同じやうな境遇に松を置くやうな方法を考へるがよいのである、根上り松とて決して特別の種類があるわけではなく之れみなその境遇に應じてかゝる性状を有するに至つたのであるから成る可くかゝる境遇に松を置くやうにすることを考へさへすればよいのである。

第十三話 松の盆栽と苔

盆栽に苔は付きものである、いや離るべからざるものである、如何にも年経たらんが如き状態を呈するのが盆栽の貴ぶ可き點であるとすれば自然苔に由つてそ

の状を現はし出すのは必要なること云はねばならぬ。
苔に關しては多年盆栽に經驗を有する某實驗家の説を掲げて參考に供しやう。
苔は一般に地濕り自然の古びより生ずるの性質なれども中には日に炎かれて濕り潤ふては日に輝らされて生ずる苔もある又は腐木土に化せんとする際苔を蒸し出すものもある此等は青苔とて屋根又は土臺の腐れより生ずる苔でかゝるものは最も劣等のものにて之れをそのまゝ剥ぎ取つて盆中の地盤へ張付けるは誠に見苦しきものもし此種類を用ひんとするには之れを細かに解きて砂に交せてよく揉み込み其砂を假鉢の中に蒔き置きて砂の中より苔の新芽を出したるときその付けんと思ふ盆中へ栽に付けるのである。
苔の中で最も愛す可きものは極く細かな花形の莖の短かい「ピロオド」のやうなものを最上とするので之れは其生ずる所は赤土の上に黒地風の土質を以て掩ひ

苔の種類の示す

苔青



花短ノ莖



苔土赤



第 二 十 八 圖

たる木蔭の寺院などの古びたる所に生ずるものである、同じく花形の苔にて莖

長くて莖を生ずる大柄のものは赤土の木蔭にていと濕り多き所に生ずるものであるけれどもこはあまり面白からず然かし盆栽并に植木鉢に植え込む物の柄に

由つては用ゆることもある。

苔の類を示す

苔石



苔花塵楸



苔花種毛



圖九廿第

又齒朶の形をなして地盤を這ひあるく苔がある、之れは石苔にて多くは古き石
塔などに盛れ居るものである、此ものはあまり上品ではないけれども青苔より

は宜しく之れを盆中に張り付けんとするには苔を水につけ箸にて挟み地盤へ工
合よく張り付け其上へ土と砂を交へまんべんなく蒔き苔の聊か見へ得るやうに
し置きて後雨に遇はず

ときは自然に味合付い
て古色を出し早く根を
下すものである。

鼠齒形
の苔



苔
の一種



圖十三第

又苔足長き分は見苦し
きものであるから延び
過ぎたるものを缺んで
よく苔先きを揃るのを良しとする。
右の外岩苔とて極めて細かな岩苔やうのものにて先の方鼠の齒のやうなものが

ある、此等は木蔭の軒間にて日光のいつもさぬ所に生ずるもので劣等のもの

で其用ゆる物柄に由らぬと付けぬ方を良

しとするのである。

又所に由つて生ずるものであるが花形の

葩が長くて甍のやうに盛れるものがある

此等は中等に位するもので大柄の盆栽

には用ゆるも可なりのものである。

以上述べたもの、外特に盆栽の地盤へあ

しらいとして必要のものは叡山苔であつ

て之れは極めて寒氣に弱くいたみ安きも

ので消へがちのものであるから寒中は其

叡山苔



第三十三圖

上を柔らかな藁のやうなもので被ひて寒氣に打たれぬやうにしなければならぬ、また此ものはその性として地盤を這ひ延びる毎に細き小根を一本宛下すものであるから之れを植へ付ける際は小根のいたまぬやうに小根一本毎に細き箸で土にておさへるやうに注意することが肝要である、また叡山苔はその特色として寒氣の頃に到つて日に當て置かば輝葉となつて淺き色の紅葉をなすものであるからその色はいかほ紅くなつても枯れたのではない。

また苔を石に付けんとするには其石の付ける可き場所へ粘り氣ある土を塗りつけ其上へ苔を水に浸したものを著にて張り付けるのである、そして其周圍を土にてふせ押へて之れを先づ假水盤の中へ入れて始終水の切れないうやうになし置かなければならない。

此石に付ける苔は成るだけ目の細かきものを撰みて付けるのがよろしく花苔な

らば成る可く莖の短かいものを用ゆるがよい。
すべて苔は梅雨前から芽立つものであるから先づ五月上旬頃から石に付け初
めるのがよろしくそうすると梅雨の頃になつて芽立つと共に次第に石肌えも充
分根を下し石に固く附きてついには自然に生へたものと違ひのないやうになる
ものである。

石に苔の能く附く否とは石の性状に由ることも多く水成岩で水を吸収する力
の強きものには附き易くさもないものは附くことが困難であるからかかる場合
には日に二三度位如露にて水を掛けて絶へず湿氣を與へるやうにしなければな
らない。

また即座に苔を張り間に合はせんとするには石苔の細かなものを剝がし來り其
張らんとする部分へ「烏モチ」を塗つて張り着けるがよい、併かし不手際にては

見若しいものであるから体裁よく附けなければならぬ。

一般に川石は苔着きの悪しきものでかゝるものに苔を附けんとするには「ツノ
マタ」又は「フノリ」を沸かして之れを石に充分布きて苔の細かきもの、乾かし
たものを揉みほごき粉の如くにして一面に振り蒔くのでその後は時々水を注ぎ
て乾かぬやうにし充分に湿氣を與へ置くこと苔から自然と根を下して天然のもの
と變りのないやうになるのである。

なほ「フノリ」を石に布きて後その上に鶏糞か若くは硝石や灰などの薄き液肥
を少し施し置けば苔は盛んに繁殖するものである。

また石に苔を附ける場合に急を要せぬときには庭の木蔭の苔の生じ居るそこ
ろへ石の七分を顯はし三分位を土へ埋め置けば地面に生せる苔が自然に這ひ上
つて見事なる苔石を得ることが出来るのである。



圖二十三第

此は比 叡山と 名つけ られた る有名 な石で ある

第十四話 松と石

松は石に依つて引き立ち石は松に由つてその趣味を増すのである、單に松に限らず、すべて盆栽は石が伴はなければ面白くない、庭の松は岩石の間からその枝を現はしてこそ趣きがあるのである、白砂青松の海岸でさへ松は石に伴ない石は松に伴ふてその景色を増すのである、岩上の松は昔から詩人の題目であつた、黒き岩と青き松と白き砂とは自然の繪にも勝

れる景色を現はしておるではないか、所詮は松と石とは離る可からざるものと云はねばならぬ。自然の大なる石については別に説明するほどのことはないが盆栽に用ゆる石については世上種々の珍石に名稱を附して楽しんでおるものが多い従つて色々な名石が世に多くある



圖三十三第

此石は 所謂岩 上の松 を作る に最も 適當の 石であ



圖六十三第

之は水
成岩質
の石に
て逸品
である



圖七十三第

之は山
形をし
た名石
である



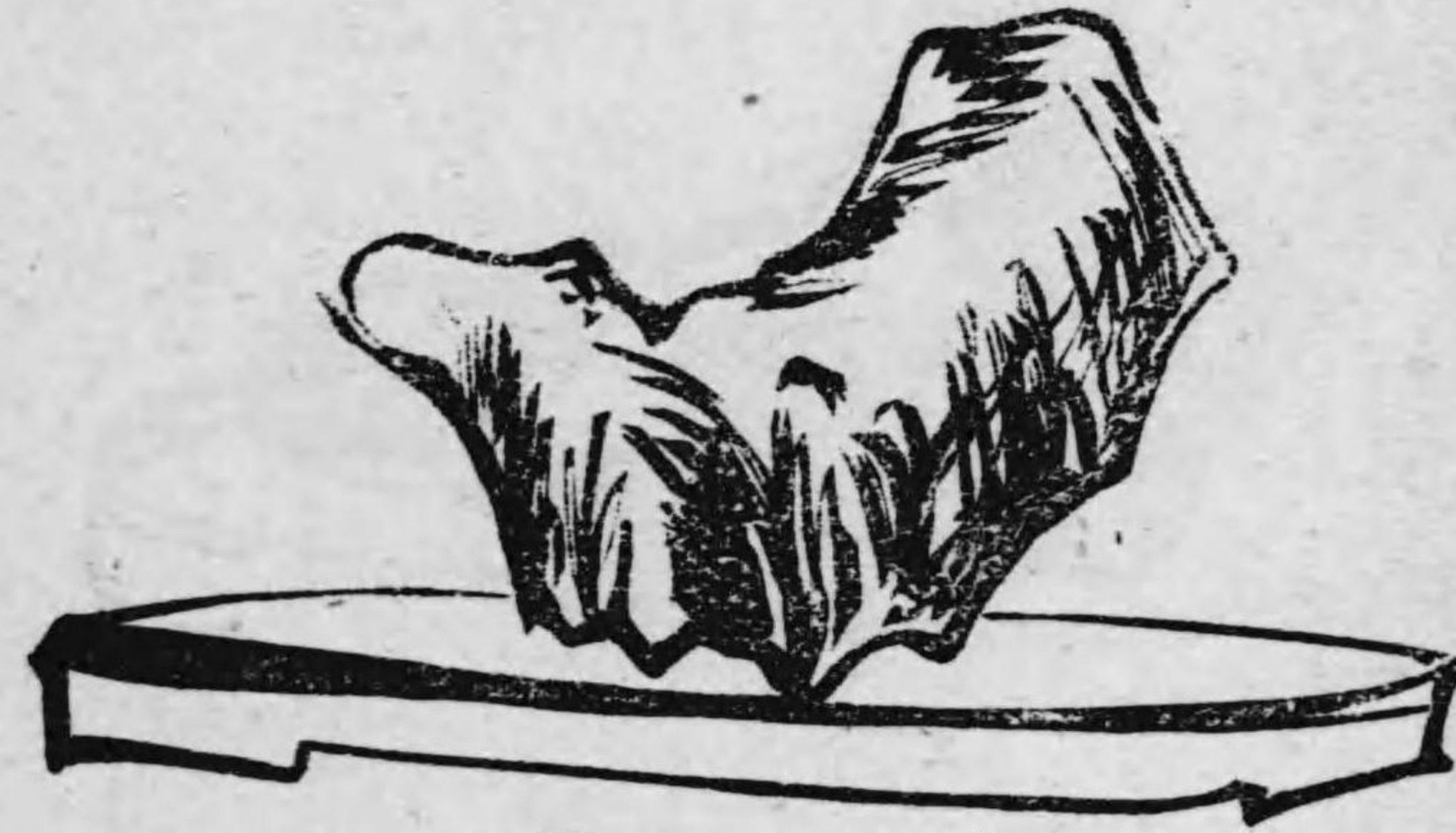
圖四十三第

之れも
一つの
名石で
某氏秘
藏のし
るのであ
る



圖五十三第

此石は
某氏の
秘蔵品
にて幾
名山を
ぞ付け
たもの
である



第三十八圖

之は中
央に穴
のある
自然石
で盆栽
に用ひ
て面白
ひ石で
ある

けれども一々述べるわけに行かぬから只二三の参考圖を示して置くことにしやう。
以上は只参考のために専ら名石と稱せらるゝものを挙げたのであるが松を栽培する際にはかゝる形状の石を参考として適宜之れに松を配合し以て一段と趣味を深からしむるやうにしなければならぬ。

第十五話 松と詩と景色

濱の松風は吾等に何をさゝやくか詩か歌か將た戀か藻蘆焼く磯邊の松は何時も村郎村嬢の集會所であつた、熱き涙が幾度び注がれたか月は白く松は黒く波の音高き濱邊はそれ自身が詩歌であらねばならぬ、文字を知らぬ村人は詩を作る法を知らない歌を讀むことも出来ないけれども人一樣の自然を直覺するの力は持つておる、無音の詩歌は松を題として何時も彼等の心に唱へられておるのである、松は我邦到るところの濱邊を飾つておるのであるから何れ漁村の人々は松に由つてどれ程感化されておるか分らない、濱の松風は常に子守歌の赤子に於けるがやうに村人に自然の恵みを傳へるのである。

「君と分れて松原行けば松の露やら涙やら」と云ふ俗歌は、或は都人には面白

からの響を傳へるであらうが村人には千萬無量の意を含んで居るものと解せらるゝのである、所詮は松は美しき艶なる草花のやうに樂天的の趣味は或は與へぬかも知れぬが教訓的である悲哀なる深き意味を吾人に與へるのである。

管に松は村人の詩歌の題となるばかりでなく、雪の朝雨の夕の松のなせる景色はどれ程都人士の心緒を亂すであらうか、幾多の歌や詩は立どころに唱へられたか一々余の説明を待たないのである、枝振のよき庭の縁なる松に白き雪が掛つてその上に月が高く上れるのとき世は一つの銀世界と化するのとき雁が三羽二羽五羽と高く飛ぶのとき多感なる詩人の心緒は亂れるのである。

松は美しき花も開かない甘き實も結ばないけれども他に比す可きものゝないその四時縁なる針状の一種の葉や或はその面白き四方に擴がる枝は理屈以外に人心を引付ける作用を持つておるのである、天の橋立や陸奥の松島の景色は松

に由つて現はされておるのである、それが讀まれたる歌や詩はみな松が根本になつておるのである。

歌は自然に發したものでなくてはならぬ、詩は多感なる詩人の心の寫真であらねばならぬ、松を詠じたる歌や詩は松そのものゝ直覺的作用から出たのである、之れ松自身が他の植物の企て及ばない一種の特種なる性状を有するに由るものではあるまいか。

余は茲に松について古くから讀まれたる詩や歌を無意味に並べ立てることはしない、然かし松が如何に吾等の人心に影響を及ぼすものであるかと云ふことを讀者諸君に悟らせたのである、それは何故であるかと云ふことは説明の限りでない、人の心の琴線に觸れるものは理屈ではない、直覺的のものである、歌や詩はその心の琴線に觸るゝ何者かあつてこそ始めて口から出るのである、いや